

エッセイ集

学ぶことの意味

～学力低下論を越えて～

著：仁田 悦朗

はしがき

ここにおさめたのは、これまでブログや日記、ホームページなど、あちこちに書きためてきた随想のいくつかである。中には、この電子書籍を作成するにあたって新たに書き加えたものもある。

その話柄の中心は、子どものよりよき学びを期するために、学習についてどう考えたらよいかといったことであり、学習を構想する際にベースとして大切にしたいと考えている教育上の視点である。

中にはそうしたことについて考えるヒントとなりそうな教育周辺の話題もある。そのような話題を取り上げながら、望ましい教育のあり方について考えようとしたのが、この稿の目的と言って良い。

この数年間、学校教育は激しい動きにさらされ、学校現場もその動きへの対応を迫られ揺れ動いている。それらの「動き」は、これまでの教育研究成果を踏まえたものではなく、むしろ通俗的な学力論議に拠つたものであり、将来を生きる子どもたちの自立にとって望ましいものであるとは思えない。

ことに、市場経済の「競争の原理」を学校教育に適用しようとする動きは、子どもの学習にとって、好ましくない影響を及ぼすことが懸念される面を多く持っている。学校は均一の製品を作り出す工場ではないからだ。

「学ぶ」とは、学習対象と自己との間に関係を見いだし、対象により深くかかわることで新たな関係を築き直す作業である。ここでは、自己の取り組みを観察し、統制してよりよく学びを展開して行こうとする「自己内自己」の働きを支えとした自己学習の構えや力が重要になる。

そうした構えや力が「自立的・自律的な学習」を可能にすると考えられるが、そのような学習を通して、人は自己を確立していくのだ。その意味で、学習上の成果はアイデンティティの獲得と無関係ではないのだ。

さらに、人は「学ぶこと」を通して「学ぶこと」を学んでいくと考えられてきたが、学ぶことは一方的に教えられて習うことを意味しない。対象の持つ「不思議」や「よさ」に感動し、その「不思議」や「よさ」に心を弾ませ、謎に迫ることを楽しみつつ対象との関係を築いていくことが「学び」である。ここでは、自らの中に生じる「問い」が学びの活動を貫き、学ぶ行為のエンジンとして働くことが予想される。抜き差しならない「問うこと」を抜きにした学問は、学問とは呼べない。学問とは、文字通り「問う」ことを「学ぶ」

ことに他ならないのだ。問うことは、また、モノゴトの本質に迫り見極めようとする行為であり、それゆえについつい対象を真摯にまっすぐ見つめようとしてしまうのだ。だからこそ対象の前では謙虚になり、対象から自分にとって意味のあることを受容しようとするのであり、学びを通して人は自身自身を見つめてしまうのだ。だからこそ学びはその人の「生き方」を変えるのだ。すなわち「生きること」について考えない学びなど存在しないということでもある。

残念ながら、ここ数年の学校教育への要求はよりよき「学び」を期しているものであるとは思えない。一定の知識や技術を「覚える」ことを、しかも他者と競い一元的な尺度で測定される中で強要されては、アイデンティティの獲得はもとより、自己統制的な学習能力など育ちようがないからである。まして「生きる」ことにつながる学びになることなど期待できそうもない。

何を学習ととらえるか、学力とは何か、自立的な学びとはどのようなものか、等々についての十分な検討も議論もされないまま、学力低下を叫ぶマスコミの報道の前に学校教育が低次な方向に舵を切ってしまった感がある。

問題の所在は学力が低下していることにあるのではなく、それを引き起こしてしまった学習意欲の低下にこそあると考えられるが、それが何に起因しているのかについて見極めなければ、よりよい学習へ子どもたちをいざなうことはできそうもない。

学習への意欲、意志を育むために社会が、大人が、学校がどう考え、どう変えることが必要なのか、といったことについてさまざまな話題を通して共に考えたいだければ幸いである。

(2011/02/27)

目次

はしがき	1
少し前の話	5
自ら手に入れてこそ	8
働くことしか能がない？	14
新しい学びへ	17
「ハウツーもの」ばやり？	20
脳トレについて	22
二世の活躍に見る学びの論理	26
教員免許更新制度の見直しについて	30
「学習観」の貧しさ	33
ほんとうの学力を	35
秋葉原の事件に思う	39
学習に背を向ける子どもたち	42
学ぶ目的	45
教育は誰のためのものか	50
見極める目を	56
学校で「塾」？	59
学習意欲を	62
「こどものために」という視点を	64
大地震の報に接して	68
学びの楽しさを	
あとがき	

少し前の話

もう数ヶ月も前の話であるが、独立行政法人国立青少年教育振興機構の調査（「子どもの体験活動の実態に関する調査研究」（中間報告…平成22年5月）によると、子どものころに自然体験などさまざまな体験を積んだ者ほど、大人になってからの「意欲・関心」「規範意識」「職業意識」が高いということが明らかになった、という報道がなされた。

この報告は、'09年11月、インターネットによるアンケート方式で実施した調査により、20代から60代の成人5,000人から得られた回答について統計的な処理をし、分析した内容についてのものである。

その報告によると、

結果① 子どもの頃の体験が豊富な大人ほど、やる気や生きがいを持って
いる人が多い

■子どもの頃に「自然体験」や「友だちとの遊び」などの体験が豊富な人ほど、「もっと深く学んでみたいことがある」といった物事に対する意欲や関心、「電車やバスに乗ったとき、お年寄りや身体の不自由な人は席をゆずる」といった社会における規範意識、「社会や人のためになる仕事をしたい」といった職業意識が高くなる傾向がみられた。

■子どもの頃の体験が豊富な人ほど、「どんなこともあきらめずにがんばればうまくいく」、「大人になったら自分の生活にかかるお金は、自分が稼ぐべきだ」と回答した人の割合が高くなる傾向がみられた。

■子どもの頃の体験が豊富な人ほど、最終学歴が「大学や大学院」と回答した割合が高く、その他、現在の年収が高かったり、一ヶ月に読む本の冊数が多くなる傾向がみられた。

結果② 友だちの多い子どもほど学校好き、憧れる大人のいる子どもほど働くことに意欲的である

■友だちの数が多い子どもほど「学校が好き」と回答した割合が高く、憧れる大人がいると答えた子どもほど「自分にはなりたい職業や、やってみたい仕事がある」と回答した割合が高くなる傾向がみられた。

という調査結果が得られたとし、それゆえ、

結果③ 小学校低学年までは友だちや動植物とのかかわり、小学校高学年から中学生までは地域や家族とのかかわりが大切だと結論づけた上で、

結果④ 年代が若くなるほど、子どもの頃の自然体験や友だちとの遊びが減ってきていることに懸念を寄せている。

その話題を取り上げた新聞やテレビの報道では、「自然体験などが多いものほど、成人後の学歴と年収が高いということだ」と、現世的な利の部分に着目し強調して報道していたが、それは余りにも浅薄すぎる。

教育の目的は良い大学に入るためであったり、年収の高い職業に就くためであったり、他よりも優位に立つて豊かな暮らしをするための学びを指導することにあるのではない。

受験の技術や、就職活動のスキルを身につけることが重要な教育の目的であり、それこそが能力の陶冶、すなわち「力」を身につけさせ、人間を成長させることに直接つながるとの考えに立つからこそ、学習塾の講師に授業の仕方を学ぼうなどという軽率で、あり得べからざる行政の対応にもつながるのだ。

教育の理想や理念など棚上げにした、教育論とも呼べないような俗な教育観が世を覆い、それをまともに受け止めるような風潮が教育界に対する抑圧的な働きをなしていることは、嘆かわしいことだと言わざるを得ない。

それは、こうした安易で底の浅いマスメディアの次元の低い取り上げ方や、ニュースを扱う視点にも大きく起因していると言わざるを得ない。

この調査報告に示された最終学歴の高さや年収の高さについての記述は、その部分に力点があるのではなく、そこに至れるような「読書を好む傾向」やそのことよって生じる想像力や理解・読解力の高さ、また粘り強く取り組む傾向、自分を信じてやり抜こうとする姿勢、などが豊富な体験活動で身につくということに力点があるのは言うまでもない。

気がつけば、この数年間、この国には「〇〇力」という言葉が氾濫し、あたかも「力を持つ者」こそ望まれる人間の姿であるかのような扱われ方である。人間力、学校力、教師力など、過去には耳にしたこともない造語が生み出され、力こそ善とでも言うような、いわば「力の権化」をめざそうとする浅ましい姿を露呈してしまっているかのようである。

折も折、山折哲雄氏（国際日本文化研究センター名誉教授）がある新聞のコラムに次のように書いていた。

そういえば、いつごろからツールとスキルといった言葉が流行りだしていた。

どんな道具をつかい、どのように技術をアップさせるか、要するに、数値化されただけの目標を立ててあくせくする。それを迫りかけるように、ハウツーものの全盛期がやってきたようだ。

あわてたわれわれの社会は、物の豊かさにたいする心の豊かさ、といったスローガンを口にするようになったが、時すでにおそし。あとからやってきた次世代の子どもたちはものごころがつきはじめたころから、その物と心がすでに分離してしまっていることを知らされるはめになったのである。

（中略）

考えてみれば、そもそもこころという言葉は、宗教心、道徳心、公德心といったような熟語の形で用いられていたのである。

それが気がついてみれば、心だけが切りはなされ、離れ小島のように裸にさせられていた。

このごろでは、人間の心というかわりに、人間力などという使われ方までが発明されている。

この現状をどうしたらよいのか。

人間が「よりよく生きる」上で必要なのは、力ではないし、力を伸張させることだけに教育の目的があるのでもないことは論を待たない。

価値あるモノゴト（よさ）に気づく感覚やそれに支えられた情操（よさに向かおうとする心情）、さらにはそこで発揮される内発的な意欲や関心といった、いわば「生きる上での意識」、すなわち個々の「心の働き」を養い育てていくことこそ肝要なのだ。

この調査は、『子どものあるところに自然に触れた、友達と体を使って遊んだ、地域の大人たちと接したなどの経験が多い者ほど、大人になってからの「意欲・関心」「規範意識」「職業意識」が高い』と結論づけているが、その点にこの調査結果の意味があるのであり、年収の高さや学歴の高さにつながるとはどこにも書いてはいない。

年収の高い者、学歴の高い者は、子どもの頃に自然に触れる体験や友だちと遊んだ体験をしたと答えた割合が比較的高い、と言っているだけで、そのことが年収の高さや学歴の高さに直接結びつくとは結論づけていないはずだ。

マスメディアが人々を煽り、ますます低い次元に人々を誘導するかのようには、積極的に文意を取り違え、結論を読み違えて、着目すべき箇所ではないところに視点をあてて報道する姿勢は、安易・軽薄というよりも、悪意すら感じるのである。

それはさておき、自然体験の豊かさ、対人間経験の豊かさ、頭と身体でどっぷりと活動に取り組む体験の多寡が、学習に望ましい効果をもたらすという考えに立って学習を構想したのが「総合学習（あるいは総合的な学習）」である。

このような調査を待たなくても、それまでの研究の成果と課題から総合学習を無から生み出し、提唱した先進的な研究校では、そのことについては見通し、それだからこそ「総合学習」を構想・提唱してきたのだ。

そして、今回のきちんとした調査結果から得られたこの結論は、その見通しが単なる予想や仮説ではなく、的を射たものであったことを改めて知らせてくれたのだ。

その意味で、この研究調査の意義は大きい。と同時に、総合学習本来の趣旨からそれてしまった感のある、総合的な学習の時間を再度見直す契機としなければ、望ましい学習の在り方の実現は難しくなるのではないかと思われるのである。

何と言っても、「総合学習」について考えることは、「子どもにとって意味のある学習」について考えることに他ならないからだ。

(2010/08/22)

自ら手に入れてこそ

昨日（9/11/01）の読売新聞の読者投稿欄「気流」に、小学校の女性教師の手による次のような記事が掲載されていた。
タイトルは『楽しいから熱中』とある。

担任をしているクラスの子どもたちは、私がピアノで弾くアニメソングが大好きだ。
弾き始めると一緒に歌い出す。給食の前などはざわついていても、イントロ部分を弾くだけで静かになる。
子ども頃はよくオルガンを弾いていた。アニメの主題歌を弾けるようになるのが楽しかったからだ。
習っていたらもっとうまく弾けたのにも思う一方、習っていたらあんなに夢中になっただろうかとも思う。
自分だけの遊びだったから、熱中したのではないか。
そうして身につけたことが、今、子どもたちを引きつけていることに驚いている。

お稽古としてピアノのレッスンを受けることをしなくても、自分の楽しみを追い求めることで鍵盤楽器の演奏技能を身につけることはできる、ということの証拠である。
いや、もしかするとレッスンを受けて教わらなかったからこそ、楽しく夢中でオルガンに向かい、その演奏技能を「かけがえのないもの」として身につけることができたのであろうことが、この短い文章からは窺える。
しかも、それが自分の楽しみだけに終わらず、子どもたちが「音楽の楽しみを味わう」ことに寄与できる力となっていることも、この文章から窺える大切なことである。

我が国では各地の公民館などで、生涯学習講座と称するさまざまな講習が催されている。

その多くは「教えてもらって習う」ことを柱としている。

講座を主催する側の『こんなことを教えますので、教わりたい人はどうぞご参加を』という指導の論理がまずあり、参加者の多くはその指導論理に沿

って「教えてもらって習う」という例が多いのである。

これは、生涯学習の理念から言えばほんの一部、あるいは「例外」でしかなく、昔いわれた「生涯教育」の姿でしかない。

ここで見えるのは「教えられて習う」Learn」という受け身の学習の姿でしかないからである。

だが、生涯学習でめざそうとしたのは、学習者の「学ぶ」Study」意志こそ尊重されるべきだとする理念で、いわば学習者の主体的な姿を思い描いてきたはずである。

しかし、日本人の多くは「お稽古をつけてもらう」ことを「学習の姿」ととらえることが多く、それゆえ生涯学習社会の実現を、と標榜しても多くの例に見られるような〇〇講座といった「習い事」から市民も行政も抜け出せないであろう。

私の住む市でも、生涯学習講座の開設が市報などで紹介されているが、そこに見えるのは、デジカメ講習会、生け花講習会、俳句講座、市史講座等々、いずれをとっても「教えてもらう」ことを柱としたものばかりである。

学習者自身が、自らの手で探り・調べ・つくり・手に入れ・築くことを旨とした「Study型」によるものは全く見当たらないと言って良い。

多くの市民が習う「知識や技術」の多くは、先人があれこれと調べ、試行錯誤し、検証し、冒険的な試みを通して築き上げたものである。

そして、そのような知的な探検をすることやそのことによつて自分にとって納得のいく解答を得ること、そしてそのことがもたらす知的な興奮を味わうことが、「学ぶ楽しみ」であり「学ぶ味わい」であるはずだ。

「教える」という作用は、そうした「学ぶ楽しみや味わい」を学習者から奪ってしまう危険をはらんでいるということを、指導者は認識しておく必要がある。

一方、学習者は、多くのことは教えてもらわなくても自分で探り身につけていくことができるし、それが効率的ではないかも知れないが「かけがえのない、そして剥落しない安定した知の獲得」への近道だし、またそこで得られる感動や驚きこそが学ぶおもしろさなのだという認識をもっと持った方が良い、と私は常々思っている。

フォークソングの歌手として活躍した吉川団十郎が、あるとき作陶をしたいと思いいち、たった三冊の参考書だけを頼りに粘土をこね、自ら焼き窯をつくり、実験的な試みを通して陶芸の技術を身につけて磨き、どんな先生に

もつかず、いつしか個展を開催できるまでになった時の言葉がおもしろい。
曰く『師匠につくと、自分のしたいことの支障になる』。

どうしても手に入れない、のどから手が出るほどに欲しい、と学び手が思えば多くのことは（たとえ苦労や障害があっても）手に入れることができるはずだ。そこでは、教えてくれる人がいるかどうかなどは問題ではない。むしろ、教えてくれる人がいない、あるいは教わるチャンスがないからこそ、手に入れる楽しみや興奮を味わい楽しみながら望むものに近づくことができるはずなのだ。

そうしたことを、この投書の主である小学校の先生は語っているはずだし、そのような「自ら手に入れる」経験がその後の学習の仕方に大きな影響を及ぼしたに違いないと勝手に想像している。そしてまた、そのようにして手に入れたワザが生きて、子どもとの交流に大きく役立っていることは何と幸せなことかとつくづく思うのである。この先生にとって幸せなことに違いないが、それ以上に子どもたちにとって何と幸せなことか、と思うのである。

ピアノを弾く先生のまわりを大勢の子どもが取り囲んで、元気に声を揃えて歌っている様子を想像するだけで微笑ましく、嬉しい気分になってくるのである。

「自ら手に入れること」の大切さが語られているこの投稿の短い文章に少しく感動を覚え、我が意を得たりと独りごちている私である。

(2009/11/02)

働くことしか能がない？

この春、千葉県佐原市を訪ねた。
古い町並みが保存・整備され、平日にもかかわらず、多くの観光客が訪れていた。

特に小野川沿いの家並は、若葉が風になびく柳並木に彩られ、小江戸の名にふさわしいしっとりとした落ち着いたたずまいであった。

そんな中に、伊能忠敬の旧宅が保存されている。川をはさんだ反対側には、伊能忠敬記念館がある。

豊富な展示物と内容で、初めて知ることも多く、時の経つのを忘れるほどの偉業に感銘を受けたものである。

有名な話ではあるが、婿養子に入った伊能家の家業を49歳で長男に譲り、50歳で江戸に出て数学・天文・暦学者の高橋至時に師事し、測量・天文観測などを修め、そのことをきっかけとして日本全土の測量を思い立ったことは、当時の平均年齢を考えると、驚くに値する。晩学と言えば晩学過ぎるほどの遅いスタートであるし、実測の旅に出たのが55歳からのことであること、さらに第十次測量と「大日本沿海輿地全図」の作成にかかったのが71歳であることを考えると、文字通り長い長い探求の旅を生涯のゴール近くに来てから始めたことになる。

同様に、生涯のゴールに近づいてもなお盛んに作品を生み出し、自分の表現を追い求めた人々が多い。

たとえば、葛飾北斎は1849年、90歳で亡くなる三ヶ月ほど前まで絵を描くことを辞めなかったというし、96歳まで矍鑠として公演活動などを行った作家、住井すゑの代表作『橋のない川』第六部を刊行したのは71歳の年であった。そればかりか、80歳で絵本まで執筆しているのだ。

また、随筆集「洩(はな)をたらした神」を執筆した吉野せいはいは、それまで福島県の山の中で開墾と子育てに生き、古希を過ぎてからこの随筆の執筆に取り組んだのだそう。

それまでモノを書いたことのない人間が、最晩年になってそれまで持ち慣れた鋏をペンに持ち替え、借り物ではない、自分の言葉で文章を紡ぎ出す作業に取り組み、書物として世に送り出したというのも、書き残したい思いが強く、書かずにはおれない突き動かされるような思いがあったのだろう。

それが活字になって出版されたのは、74歳の時であり、大宅壮一ノンフィ

クシヨシ賞や田村俊子賞を受けたのは75歳のときであり、その2年後には亡くなっているのだ。文字通り、最晩年になって「自分が生きた証」を遺して世を去ったことになる。

ここに挙げた人々は、世に言う「後期高齢者」でありながら、自分の生命の灯火を最後まで旺盛に燈し続けて生きた人々である。決して「余生」を生きたのではない。

高齢に達してから、こうした見事な「後世に誇るべき遺産」を残した人たちだけに限らない。

人間は誰しも、自分自身の「問い」に向き合い、それを解決したいと願い、行動を起こすことで「自分自身の生」を生涯通して生きているのである。

極論すれば、それが世の中の役に立つか立たないか、利益につながるかどうか、名譽なことかどうかなどは無関係に、問い・探り・考え・築き・創造することに夢中になり、それを楽しみ、人生の最後の瞬間まで生きているのだ。

たとえこれまで自分を育ててくれた世間への恩返しに、と奉仕活動に精を出すお年寄りがいたとしても、それは「活用される」ことを欲しているのではない。「自分の生」を生きたいと願うから奉仕活動に取り組んでいるだけのことなのだ。

結果として笑顔で喜んでくれる人がいれば、なおさら自分の喜びが増し、嬉しさを感じるものがあっても、それを目的としてはいいはずだ。

どこかの国の首相が、『高齢者は働くことしか能がない』とか『元気な高齢者をいかに使うか。使えば納税者になる』と、まるで封建時代の領主が領民に対するような時代錯誤ともとれるような発言をし、失言だとしてマスクミに取り上げられ、『真意が伝わっていない。』と釈明をするということが先日あったばかりである。

真意がどこにあつて、あのような発言になったのかわからないが、先に挙げた人々の旺盛で実り豊かな生き方を見れば高齢者が「働くしか能がない」などと言えるわけがない。

また、例に挙げたどの人々も「自分の生」を生きたために描き続け、執筆に精を出し、黙々と測量作業に取り組んだのであつて、誰かに「活用されるためにそうしたライフワークとも言ふべき作業に取り組んだのではないだろう。

「活用」とは文字通り、「活かして用いる」ことを意味する他動詞で、新

明解国語辞典によれば「そのものが本来持っている機能を働きを活かして使うこと」の意とある。また広辞苑では「活かして用いること。効果のあるように利用すること」としている。

「活用」とは、もともと自分の目的を達成するために、モノ（道具や手段）が持つ機能（はたらき）の効果を期して利用することなのだ。それがいつのころからか人間に対しても使われるようになったようだが、そのことに強い違和感を覚えるのは、私だけではあるまい。

『あなたを活用したい』と言われて無邪気に喜ぶ人がいるとは思えないからだ。私ならそのようなモノを扱うような失礼な言い方はしたくない。言うとすれば『あなたのお力をお借りしたい』とか『ご協力をいただけるとありがたい』、『お力添えをお願いしたい』などと言うだろう。

先の発言の真意については「高齢者を労働力として積極的に活用する必要を強調したものである」という釈明がなされたが、活用という言葉の持つ意味を正しく理解できていれば、これとて民主社会の為政者の発言として首肯できるものではなく、釈明になっているとは思えない。「使う」にしても「活用する」にしても、「使役する」という意味合いが強く、国民を（まるで国や領主のために）使役すべき存在としてしか見ていないらしいことが窺えるからである。

人間がどう生きるかという生の尊厳に対する無理解ばかりが目立ち、共感の希薄さが浮き彫りになるばかりだが、その人の口から『私が目指す安心社会とは、子供たちに夢を、若者に希望を、高齢者には安心を、であります』という言葉が発せられても、何をかいわんやという思いばかりが先にたつし、他人事のようなその口ぶりに苛立ちすら覚える。

それはさておき、高齢者であっても日々自らの生を生きているのであって、いかに健康で元気であるからといって「働くことしか能がない」「活用すべきモノのような存在」では決してないのだ。

「老人力」という言葉を生み出し、同名の著書でお馴染みの赤瀬川原平は、『老人力自慢』という本の中で次のように述べている。

『高齢者、つまり老人というのは、金を稼ぐ道具であったことから離れながら、ひたすら自分の人生に入り込んでいく人のことである。

若いころだってもちろん人生にはまり込んでいたのであるが、現役時代はとにかく働くこと、稼ぐことがあつての人生である。

歳をとって現役を離れるということは、あとは丸ごと自分の人生でしか

ないんだから、それをどう自分で楽しむか。その「自分で」ということに重点が移動してくる。』

とした上で、

『結論からいうと、これからの老人には、趣味としての勉強を始める人が増えるのじゃないか。またそうあつてほしいと思う。』

勉強というのは、若いころにするものだが、いまは進学や就職という目的の重圧が物凄くて、ほとんどが〇〇のための勉強ということになっている。

だけど本来勉強ってそういうものだろうか。自分が本当に好きで、何かを知りたくてするのが自分の勉強じゃないか。』

と記して「老人力」の真髓について触れているが、これは老人に限ったことではあるまい。

勉強という言葉を使ってしまうと、多少ニュアンスが違うのだが、世に言う勉強を学習と言い換えてみれば、ここで語られていることは子どもにも、若者にも、大人にも共通して言えることで、自分の捨ててはおけない関心事に向き合い、生涯をかけて自分自身になろうとして生きていくのだ。

その中で、人は自分を取り巻く環境（ヒト・モノ・コト）のあれこれについて学んでいくのだ。すなわち「生きることは学ぶこと」に他ならないのである。

私が好きでよく観るテレビ番組に、NHKの『熱中時間〜忙中趣味あり〜』がある。

ここで紹介されるのは、それぞれが自分にとって放つてはおけない関心事に熱中し、没頭し、体系をつくりあげている人々の様子である。「学ぶ」とか「勉強」と言うと、学校や塾、講座などで教えてもらうことがまず思い浮かぶが、ここで紹介されているように、趣味として自分で新たな学問の領域を創り出し、自分が新しい知を切り拓き、自分の世界を広げていくことこそ、本来の「学びの姿」なのだ。

もちろん、一方でその知を正統な知の体系と関係付け、よりいっそう確かなものにするため、大学や大学院で研究するという「学び」のあり方も重要な姿としてある。

私の知人にも、そうした人がいる。あるいはいた。一人は、つい先ごろ亡くなった近所のおばあさんである。あまり親しくお付き合いしたわけではなかったのですが、お亡くなりになるまで知らなかったのだが、お若いころから

短歌に親しんでおられたようで、告別式の会場入り口には、その作品をおさめた歌集が飾られていた。立派な装丁の本である。たくさん詠まれた和歌の中から、お気に入り之歌を拾い上げて一冊の本として出版されたものだろう。

そのように自分の趣味のあれこれに楽しくも真剣に取り組み、かけがえない作品としてまとめようとしている人はたくさんいらっしゃるのではないだろうか。

また、私の友人が住職を務めるお寺で催される坐禅会で、世話人をもってられたH氏のような人物もいる。

彼は、つくば市にある産業技術総合研究所で研究員を務め、数年前に退職した70歳に手が届こうとしている人物である。退職をして一線を退き、坐禅会に参加するようになってから、ますます宗教への興味を高め、ついには都内の大学院に入学し、仏教の研究に専念。この春、その研究成果を修士論文としてまとめ、口頭試問も見事にパスして大学院を修了したのだ。今後は、博士課程も視野に入れて研究生を送りたいという。

ここまで書いてきて、似たような話を『生きることは学ぶこと』69歳からの出発』という本の中で読んだ記憶があることを思い出した。

熊本県水俣市の沢井建設代表取締役会長の沢井正氏が書かれた本である。

彼は、社長業のかたわら経営学を学びたいと強く思うようになり、慶応大学経済学部の通信教育を受講し始めたという。56歳の時のことである。しかも驚くことに、卒業することが目的ではないので、一通りの勉強をし、4年間受講したが卒業はしなかったという。その間、60歳の時にはマサチューセッツ工科大学への短期留学、翌年にはソルボンヌ大学での研修といった具合に、生き甲斐を創出しつつ学びを展開している様子が詳しく語られている。

しかもこの本が書かれた当時は69歳だが、K学園大学の大学院で経営学を学んでいて、そこを修了したら広島大学教育学部への入学をめざすのだ、と書かれている。

この本が書かれたのが1998年であるから、11年も経っている。想像するに、80歳になった澤井氏は、教育学部も見事に卒業され、念願の澤井塾を立ち上げて、若い人たちと「日本人の誇り」について学びあいたいという望みを実現されていることであろう。

あるいはまた、この本には書かれていない新たな「学びたいこと」を見いだし、それに向かって邁進されているのかも知れない。

水戸には、徳川斉昭が創設した藩校「弘道館」がある。今で言う総合大学のようなあらゆる分野にわたる文武についての教育を、藩士やその子弟に施すためにつくられた学校である。

その弘道館記には、「藝に遊ぶ（あそぶ）」という有名な文言が記されている。遊ぶように学問や芸術・武術などの取り組むことこそ、人間としての真の楽しみであり、味わいである、とでも言う意味であろう。

それは、学問の核心をついた鋭い指摘だと考えられるが、そうした探求の妙味を味わえるように教育界が教育観を転換していくことが望まれるが、それ以前に老人は自分の学びをそちらにシフトしていく可能性を持った存在であることは疑いようがない。

先に引用した赤瀬川原平は、同じ本の中で次のように述べている。

『現代の時代は、まあできるだけ全部覚えて、充分情報つかんで、役に立つことをせつせとやってるんだけど、現役から離れちゃうと、そんなに覚えてもどうってことないわけです。

限られた人生で、何を一番やりたいかということを考えるようになる。自分にとって一番充足するのは、役立つというよりも、自分が楽しいと感じられることでしょう。老人力がつくというのは、そっちが中心になっっていくということなんです。』

このように人間は、それぞれがそれぞれの仕方、「問い」「探り」「創造し」、生涯の尽きるその瞬間まで、自分の生を生きていくのだ。

その意味では、もしかすると「学ぶことの妙味と楽しさ」を実感できているのは、高齢者かも知れないのだ。

そうした人々を指して『働くしか能がない』『遊びを覚えても意味がない』と断じてしまうような、人間に対する洞察力の乏しい人間をトップにいただくこの国は、どこへ向かっていくのかと案じられてならないのである。

(2009/08/04)

新しい学びへ

先日アメリカ合衆国大統領に就任したバラク・オバマは、就任演説の中で世界的に陥っている経済悪化の原因を『一部の人々の貪欲さと無責任さにある』として、新自由主義に基づく市場経済優先の社会からの脱却を訴えた。

現代社会は、金銭、権力、地位、名声、快樂の追求といった、いわば「持つ文化」に支配されている感が強い。

そして「他者と比較して優位に立つ」ということも「良きこと」として社会に受け入れられているように見受けられるが、これも「持つ文化」を象徴する現象であろう。

それが「新自由主義」がもたらした現象であることは、言うまでもない。

しかし、世界を襲った経済的な危機は、こうした持つ文化を基調とした社会のありようが「良き姿」ではないことを如実に現して見せてくれた。

「持つ文化」は、人々の生き方を望ましい方向へではなく、欲求をむきだしにしたあさましい方向へと導いてしまったのだ。

それは、社会的な風潮としてだけではなく、教育界にも大きな影響を及ぼす動きとなり、「何のために学ぶのか」ということを置き去りにした「学力向上こそ教育の目的」であるかのごとき動きまで現出してしまっている。

「学力の向上」ということに問題があるのではない。
そこで言われている「学力」の意味と質が問題なのだ。

新井郁夫（上越教育大名誉教授）は、かつて「持つ文化」から「共にある文化」への意識の転換が重要だと指摘したが、それに呼応するかのように小松郁夫（玉川大学教職大学院教授）は新しい学習の目的として次のように述べている。

かつて、学習は立身出世のためであり、学歴を獲得するために人々は入学し、勉学に励んだ。資格を獲得し、学歴（卒業証書）を得るために学習した。Learning to have の学びであった。

その後、何かを知るために学ぶようになった。Learning to know という学びである。

未知の状態から学習によって多くのことを知り、多くの知識や技術を創造し開発してきた。

そのことは社会の中に生きる者として、何をなすべきかを学ぶことへとつながった。Learning to doの学びである。

こうした学びによって、私たちは人として正しく行動でき、有用な人物として生きていくためには、どうすればいいのかを学んだ。

次には、豊かになるにつれて、いかに生きるかを考えるようになった。

Learning to be という学びである。

人間としての教養を身につけ、人生を豊かに生きるために学ぶのである。

そして21世紀になって、私たちはいろいろな人と共に学ぶことの意義やたのしさを自覚するようになった。

Learning together という学びである。

人種、民族、宗教、性別などの違いを知り、人権を尊重し、お互いの存在を認め合う中から、グローバルな地球社会のトータルな幸福を実現することを願うようになった。

地球環境の未来が危ぶまれるようになってきた今、持続的で発展的なつながりを持つ学習が重要視されている。

「新しい公教育のあり方と課題」

雑誌「教育展望」2009,12 月合併号 pp.22

私たちは、今こそ、この指摘に謙虚に耳を傾け、かつその重要性に大いに着目し、教育の真の再生と再構築に立ち向かうべきである。

残念なことに、学校教育はさまざまな問題を抱えている。

それらの原因の多くは、社会の意識の変化に求めることができると考えられるが、人々の意識が物質的な豊かさを追い求め、競争によって「他に勝つ」「自身の優位を保つ」ことに汲々とし、真に豊かに生きることを忘れている限り、抱えている多くの問題を解決することは難しいままだろう。

すでに競争から共生へと価値観が変わりつつあるにもかかわらず、そのことから目をそらし続ければ成熟した市民社会の実現は望めそうもないが、そこで教育の果たすべき役割の大きさや重要性が浮き彫りになる。

人としてよりよく生きようとする子どもの育ちに寄り添い、保障すること

こそ、自身をそして社会をも望ましい方向に導く最良の手段であることを私
たち市民の誰もが深く認識し直すべきなのではないだろうか。

(2009/01/26)

「ハウツーもの」ばやり？

書店をぶらぶらしていて、このところ目につくのがハウツーものの多さである。

曰く『自信のつくり方』、『いつまでも老いない脳をつくる10の生活習慣』、『生きる技術は名作に学べ』、『ひとり老後の楽しみ方』、『遊び上手は生き上手』、『10歳若くなる習慣』、『確実に金持ちになる「引き寄せの法則」』、『あつ！と驚くしあわせのコツ』、『一週間で女を磨く本』、『人より20歳若く見えて、20年長く生きる』、『楽しく生きる100のヒント』等々。

決してそうした書籍ばかりをことさらに探し出して羅列したわけではない。ざっと目についたところを挙げただけである。ハウツーものは、文字通り方法やワザを示した書籍であるが、そうした類の本が書店に多く並べられているということは、よく売れるしよく読まれている、つまり需要が多いということの証でもあろう。

ということは、こうした生き方に関わる方法やワザを「本を読むことで」得よう、あるいは得られると思っている人々が多いということなのだろうか。気は確かか？といぶかしく思ってしまったてはいけないのかも知れないが、それが偽らざる感想だ。

そもそも「生き方」や「幸福」は個々人の価値観にかかわる問題だ。見も知らない他人に『あなたにとって幸せとはこのようなことだ。だからこう生きなさい』と示してもらおう必要などどこにもないし、教えてもらうべきものでもあるまい。

よりよい生き方をめざして「悩みのたうちまわり」ときには「じたばたしながら」成功や失敗を積み重ね、自分の人生を精一杯生きること、かけがえのない「生きる上での知恵」や「納得のいく生き方」を確立していくしかないのだ。

生き方に万人共通のマニユアルなど存在しないし、そのように自分なりの人生を「生きること」を通して探り確立していく中で、「自信」も獲得されるのだ。

つまり、「自信のつくり方」は指南されて身に付くものではないし、『あなたにとって楽しいことはこれこれのことだ』と指摘されて「しあわせのコツ」を会得していくわけでもない。

にもかかわらず、こうした本が世に出るといことは、それだけ「何が幸せか」「どう生きれば自分は楽しく幸せか」ということを見失ってしまっている人々が多いということなのかも知れない。あるいは、そのことを自らの手で苦労して手に入れることを避けて、容易に入手できる手軽な方法や手段を得たいとの思いからこうした本を求める人々が多いということなのかも知れない。

しかし人間にとって「楽しく幸せかなことは何か」「自分にとって生き甲斐は何か」が見えにくくなっているということは、これほど不幸なことはいと思うのだ。

モノは豊かにいきわたった。不景気だとは言いながら、手厚い保護の下でそこそこ暮らしている世の中だ。

収入が減ったとは言え、節約生活に疲れて時には高価なものを買いたいと思えるほどに金銭にゆとりもあるようだ。本当の生活苦にあえいでいるわけではなく、多くの人はかつての困窮生活に比べればずっと豊かなのだ。

戦中・戦後の日本が経験したような「生命の危うさにおびえ」「今日、明日の糧をどう手に入れるか」「今日一日をどう乗り切るか」というほどの貧困状態・困窮状態にあるわけではなく、いわばぬるま湯につかった状態にあるのが現在の日本人だと言って良い。

当時の人々は、生き甲斐とか自己の存在感が見いだせないことが不幸だ、などということを考えているゆとりもなかったであろう。何はともあれ、今日一日を無事に生き延びること、家族と分け合って何とか糊口をしのぐだけの糧を手に入れることだけが「生きる」ことを支えていたに違いない。いわば必死に生きてきたのだ。

今はそうしたことに思い煩わされずに生きることができるようになったことと引き替えに、(誤解を恐れずに言えば)充足や満足が実感できなければ自分の人生は無意味・無価値だとまで思いこんでしまうような錯誤の思考風土を手に入れてしまったのかも知れない。

その証拠に北朝鮮のコツチェビと呼ばれるような路上生活者ではないにもかかわらず、常に何かに飢え、モノに困まれ十分に持っているにもかかわらず常に満たされない思いを抱えて生きているのが現在の日本人なのだ。

持っているにもかかわらず「まだ不足」と不満感に襲われ続け、もうすでに十分幸せであるにもかかわらず、今ある幸せを実感できにくくなっているという状態は不幸であるとしか言いようがない。

このような時代がこれまでであったであろうか。

それはともかく、人生にとつてかけがえのない大切なもの、自分自身を生きていく上で譲れるはずがないものを、手軽に書物を読むことで得られるだろうと考える安易さに驚くばかりである。

書物をひもとく中で自分の世界を広げ、人間としての感性（よいものに気づく感覚）や情操（よいものをめざそうとする心情）を磨き成長させていくことは大いに薦められることではあるが、電気製品のマニュアルを手に入れるように、こうしたハウツーものに答えを求めようと姿勢は、本来の読書の意義とは遠いものがある。万人に共通の「生き方に対する答え」などあるはずもないし、そこに答えを見いだし実践したとしてもうまくいく保証などないからである。こと生き方に関して言えば、人間は一つの尺度や基準で成功・不成功を判じられるほど単純な存在ではない。人はそれぞれの人生を生きるからだ。

自己の感性や情操を磨き、生き方を考えることを通して自分自身を教育することでは「自分自身を生き、いつそう自分自身になっていく」生き方は望めそうもないにもかかわらず、小手先の方法やワザでそれを具現化できると考えているとすれば、それは安易に過ぎると言わざるを得ない。こうした本を購入しようとする人は、さほど深刻に考えて購入しているわけではないかも知れない。そうであることを祈るばかりである。

脳トレについて

読売新聞によると、コンピューターを利用した脳トレーニング（脳トレ）は、健康な人の思考力や記憶などの認知機能を高める効果は期待できないことが、ロンドン大学などの1万人以上を対象にした実験で分かった、という。世界的なブームになっている脳トレについては、これまで大規模な検証はほとんどなかったが、多くのサンプルを対象にした実験・検証の結果、言われるような効果が期待できないことが明らかになったというのだ。

研究グループが英科学誌ネイチャーに4月21日発表したところによると、18〜60歳の健康な1,430人を三つのグループに分け、英国で販売しているコンピューターゲームをもとにした脳トレを一日十分、週3日以上、6週間続けてもらい効果を調べた結果のようだ。その記事によると実験の内容は以下の通りである。

最初のグループは積み木崩しなどを使った論理的思考力や問題解決能力を高めるゲーム、もう一つのグループはジグソーパズルなどを使った短期記憶や視空間認知力を高めるゲームをした。

残り一つは、脳トレとは無関係のゲームを行った。
その結果、脳トレを続けたグループでは、ゲームの成績は向上したが、論理的思考力や短期記憶を調べた認知テストの成績はほとんど向上せず、3グループ間で差がなかった。

どのような脳トレーニングをすれば、つまりどのような刺激を脳に施せば脳のどの部分が反応し、それによってどのような機能が亢進が期待できるのか、というしっかりとした科学的な知見に支えられた脳トレーニングブームなのか、少しく疑問を感じていたが、どうやらその疑問はまったく的はずれではなかったようである。

そもそも人間の脳は、未だに解明されていない未知の部分が多いはずだ。こんな刺激をこの部分に与えれば、こうした脳の機能が高まるということが実験室の段階でわかったにしても、それが万人に対して有効であるときちんと言いつけるほど人間の脳の仕組みも働きも単純ではないはずだ。ある研究者も次のように指摘している。

『脳は複雑な部分が多く正確に説明しないと誤解を招きやすい。今どれだけはっきりした知識があつて、その中のどの知識を土台にし、どの角度からそういえるのかを明確に発信することが大事。自分が脳科学者だと自称したとき、あるいは博士号を持っていると言われたら、一般の人には否定することも難しい。心配なのは適当な話が独り歩きすると、本当に役立つ脳科学がまやかしのように誤解されてしまうことなのです』

専門家と呼ばれる人の「一見科学的と思える説明」をもとにした脳科学ブーム、脳トレブームの中にあつて、安易に信じ込んでしまわない方が良いということだろう。

そもそも科学は、一見わかりやすい説明を鵜呑みにせず『それは本当のことか？』と疑つてかかることを基本的な姿勢として持つていくはずだ。

おもしろいゲームとして楽しんできた人にはお悔やみ申し上げるほかはない。もつとブームに乗って脳トレに励んだ人であっても、それをまったく真に受けて取り組んだり楽しんだ人は多くはないかも知れない。

あいまいな知見をもとにブームをつくりだし、「思考力が高まる」「記憶力が伸びる」「想像力や創造力が高まる」と世の人々をブームに誘い込んだいわゆる“脳科学者”と呼ばれる人々も冗談半分、エンターテインメントと違って世の人々が楽しんでくれれば良い、といった程度に思っていたのかも知れない。

そうとらえておいた方が、一般に流布されている脳科学の知識に「うさんくささ」を感じずに済むし、真摯に地道に脳科学の研究に取り組んでいる研究者に失礼ではないような気がするのである。

(2010/04/27)

二世の活躍に見る学びの論理

先日、ある新聞のコラムに次のような記事を見つけた。

書いておられるのは東大教授の船曳建夫氏。言わずと知れた『知の技法』シリーズの編者のお一人である。

書かれている内容は、先に行われた北京五輪で多くの二世の選手が活躍したことを受け、二世が活躍できる素地はどこにあるかということについて論じたものである。

船曳氏は、そうした二世の活躍について、遺伝の要素が強いからかと言えど、そうでもなさそうだと、言う。親子二代にわたって金メダルを取ったのは、体操の塚原親子のみだからで、むしろ親は平凡なスポーツ好きなのに、子が親の期待に応えたというケースの方が多いためだと言う。さらに、漫画「巨人の星」の星一徹のように、親の果たせなかつた夢を子に託して、猛特訓した結果かと言えど、そうでもなさそうだと考え、次のように続けている。

私は『二世論』（新潮文庫・『親子の作法』を改編）で、各界の成功した二世にインタビューして、いくつかの共通点を見出した。

その一つは、「親は教えない」ということであった。

親は、教えていては子が自分以上にならないことを、自分自身の苦労で知っている。一方、子の方は親を越えるためには、親を否定し、対決しなければならぬことに気が付く。オリンピックの「二世」たちも全く同じに思える。

オリンピックで活躍するような選手は、そもそも早くから親の水準を越えてしまい、親は教えられるなくなる。

猛特訓は、専門家に託すのだ。

では、「親が教えない」としたら、親は何をしたのか。

きつかけを与えたのだ。

柔道を、水泳を、野球を始める環境を与えたのだ。

中には、自宅を改造してレスリングのマットを作った親もいる。

とりわけスポーツのような、本人が大人になってから選んでいては一流になるのに後れを取ってしまう分野では、人生の始まりの段階で、その楽しさ、苦しさを乗り越える快感を「教える」ことは重要であろう。でも、そのあとは、親という存在を目標とし、親の言葉を心の支えとし、子が「学ぶ」のだ。

「教え」はきっかけであり、人は自ら「学ぶ」ことで真に成長する。しかし、反復練習によって技を積み上げていくスポーツなら、「教え」込むことで成長するのでは、と人は思うかも知れない。たしかにある水準までは、それも相当に高いところまで行けるだろう。しかし、金メダルを争うところでは「反復練習」は利かない。これまで無かった条件や事態に対処して、前人未踏の域に入っていく。そこでは、親離れた子の自立が必要である。その「最後の一步」が届くか届かないかの違いは、今回のオリンピックでも、どれとはいわないが、見られたように思える。親子鷹よりも、鳶が鷹を生むのが現実なのだ。

船曳 建夫（東大教授）

読売新聞 2008/09/02

『動機づけに過ぎない親』〜北京五輪「二世」の活躍〜より

ここに書かれていることは、単にスポーツという領域に限った話ではない。教育の根幹にかかわる重要な示唆に富んだ話なのである。なかならず「教えていては自分以上にならない」という指摘は重要である。少なくとも自らの知や技術を構築するために「学ぶ (Study)」という経験をしたことのある者なら、「教わって習う (Learn)」にさほど意味を感じないはずだ。「教え」てしまったては、その教えの枠内でしか身につかないし、身につくかどうかも疑わしいからだ。

悪戦苦闘し、あれかこれかさまさまに探究活動をしたにもかかわらず、どうしても納得のいく解答が見つからなかったとしよう。その挙げ句に「教えて！」という希求の状態に心が高まったときこそ教えるチャンスであり、学習者にすれば教わるチャンスなのだ。

昔から「卒啄の機」と言われているが、子と親、学習者と教師、両者の意識の高まりがあった時にこそすべてがうまくいくのだ。この絶妙のタイミングこそ「卒啄の機」である。

欲しがりもしないのに与えるという行為の無意味さを知り抜いていた先人の洞察力に改めて敬服すると同時に重要な示唆と再認識すべきなのである。

そこで、親や教師は直接教えるのではなく、「学びたくなる・知りたくなる・探りたくなる」環境を整えることにウェイトを置くことの大切さに気づかなければならない。

そのためには、やはり「教え」ずに、無言でその楽しさや喜びを親自身、

教師自身の姿で示す必要がある。

大人の中には、わからなければ、あるいはできなければ「楽しくない」だろう、「楽しくない」はずだ、と思い込んでいる人は多い。

しかし、その一方で不思議なこと、疑問に感じること、いぶかしいことに遭遇したときなぜかしら心がときめきくことも知っているはずだ。

それは、人間が本来「知的好奇心の旺盛な存在」であることの証でもあるが、その一事をもつても「わからなければ楽しくない」ということが誤解であり思い込みであることは明白だ。

誤解を怖れずに言えば、「わからなければ、できなければ楽しくないはずだ」と思っている人は、残念ながら未知のことに出会ったときに、感動したり心を弾ませたり、むくむくと挑戦したい気持ちが出すなどの経験をしたことのない人だと言える。

しかし、そのような人はあるまい。誰しも、学習やスポーツに限らず、何かいろいろな分野でそうした経験をしているはずだ。ただそのことの重要さに気づいていないだけのことなのだ。

そのわからないことに、あいまいなことに心をときめかせて立ち向かい、格闘し、悩みながら探究することを「楽しんでる姿」を子どもたちの前で繰り返し見せることは、子どもたちに憧れを実感させる。

憧れはそれだけで終わらない。
自分もそうしてみたいと思ひ、「わからないことがあること」を楽しみ、モノゴトの不思議さや神秘に心がときめき、あげく動き出した探究活動を楽しみ、ついついがんばってしまひ、かけがえのない「我がもの」として手に入れる努力をし、そのことで知の体系を再構築しようとする構えを自らの中に育てていくのだ。

斎藤孝は、『学ぶことは他者のあこがれにあこがれることである』と言っている。

学習者は、教師にあこがれるのではなく、教師の「あこがれているもの」にあこがれるのだ、と言う。

そして「あこがれにあこがれる」と同時に、知への欲望に欠けた教師の情性的な授業や振る舞いをも無意識のうちに模倣し、内面化していくとも指摘する。

余談だが、歴史は暗記物だと思っている教師の授業を通して、生徒は歴史は暗記物であることを内面化していくのだ。未知の世界を探究する喜びより

も、試験の点数を重視する教師の授業を通して、点数こそがすべてだとする貧しい学習の観念を身につけてしまうのだ。親や教師が「何にそこがれているか」が重要であることは、このことから言える。

こうしたことから、学びを引き起こす動機は、身近な他者の憧れに惹かれて誘発されるものではないか、と主張する研究者もいるほどである。

さて、話を元に戻そう。以上のことから、船曳氏の言う『その楽しさ、苦しさを乗り越える快感を「教える」ことは重要であろう。でも、そのあとは、親という存在を目標とし、親の言葉を心の支えとし、子が「学ぶ」のだ。

「教え」はきっかけであり、人は自ら「学ぶ」ことで真に成長する』という指摘は、以上のことからもちろぬ重要な指摘であることがわかる。

それは単なる「指導か放任か」「教え込みか活動主義か」といった二項対立的な不毛な議論を越えて、実りある学習を求める「指導観」のベースとなる重要な指摘、あるいは大切な教えであることを再確認したいものである。

(2008/09/03)

教員免許更新制度の見直しについて

本日 (2009/09/14) 付けの産経新聞に次のような記事を見つけた。

民主党の輿石参院議員会長兼代表代行は12日、甲府市内で記者会見し、今年四月に導入された教員免許更新制度の廃止に向け、来年の通常国会にも教育職員免許法改正案を提出する考えを示した。

教員免許更新制度は安倍晋三内閣が教育再生の目玉として導入を決めたが、民主党の有力支援団体である日本教職員組合(日教組)が強く廃止を求めてきた。政権交代により教育改革路線は一気に後退する公算が大きい。輿石氏は元山梨県教組委員長で、日教組の政治団体「日本民主教育政治連盟」会長を務める。

小沢一郎代表代行と太いパイプを持ち、参院民主党のドンといわれる。輿石氏は「教員免許更新制は変えなければならぬ。できるだけ早くやる方向になる」と明言、来年の通常国会での改正案提出についても「当然あり得る」と述べた。平成23年度から免許更新制を廃止することにも「間に合えばそうする」と前向きな考えを示した。

指導力不足の教員排除を可能とする改正教育職員免許法は19年6月に成立。教員は10年ごとに計30時間以上の講習を受け、認定試験で不合格となれば、2年以内に再試験で合格しない限り、教員免許が失効する。

民主党は衆院選マニフェストに「教員の資質向上のため、教員免許制度を抜本的に見直す」と明記。社民党も「免許更新制を廃止」を掲げてきた。

いかにも産経新聞らしい記事である。

その趣旨や内容、実施方法などについて多くの問題点が指摘されているこの「教員免許更新制度」を「教育再生の目玉」として位置づけ、それが廃止されれば「教育改革路線は後退」だと主張する姿勢は、右傾化の姿勢で政治に臨んだ安倍元首相と同様、日本の教育を危うくするものだ。

免許更新制の目的は、「不適格教員を排除する」ことと「教員の資質向上」である。

子どものために全力を尽くす教員が今、求められている。問題のある教員

を何とかしてほしいという声も強い。

しかし更新制の導入は、教員の質を向上させる方法としても、不適格教員を排除する方法としてもふさわしくなく、むしろ逆効果をもたらす可能性が高い。

そもそも不適格教員を「排除」する、という目的そのものに疑問を感じざるを得ないが、こうした制度が布かれることで不適格教員の拡大解釈がなされ、少々の摩擦も恐れず子どもを最優先に考えて動こうとする教員や真剣に教育のありようを考え、実践しようとする教員までもが「排除」の対象になってしまうおそれもある。何をもって不適格とするかの基準がいまいだからである。

不適格教員について言えば、すでに懲戒や他職種への転換といった制度が整備されており、一方では学校現場でもそうした教員への指導に手を尽くそうとしてきたはずだ。

いま求められるのは、それらの制度をどう生かすかであり、膨大な免許更新業務に税金をつぎ込んでまで、そして日本でわざわざ更新制を導入するメリットは考えにくい。

また、「教員の資質向上」について言えば、すでに教員研修制度が整備され、公立学校教員には特に研修が徹底されている。教員が自発的に学び合う自主研修会も発達し、多くの心ある教員は休日を返上して実践の向上に取り組んできた。

こうした点が世界的に高く評価され、日本の授業研究に学ぶ研究拠点が近年、多く設立されてもいる。

教員の資質向上は、研修の充実や教員の意欲を喚起する環境づくりによってこそ図られるべきで、本来に必要なのは教員に研修のための時間を作ってやることであり、教員がどのような研修を望んでいるか、緻密に声を吸い上げていくことだったはずであるし、自発的に発生している各種の研修組織を支援することだったはずである。

免許更新制の法改正を推進したのは、安倍内閣と、安倍政権が作った教育再生会議である。いわば教育については素人であるメンバーで構成された教育再生会議が、井戸端会議で世間話をするように「不適格教員がいることが問題」「排除するために免許をとりあげるべき」という論議を展開したことによる。日本の教育が抱える諸問題の原因は、日教組にあるというすこぶるステレオタイプで偏狭な考えに立つ当時の文科相であった中山成彬氏は、こ

れに我が意を得たりとばかり反応し、この制度の策定を強く押し進めた経緯がある。

言ってみれば、この制度の底にあるのは「日本の教育を望ましい方向へ導く」という高い理想や理念ではなく、国による「教育と教員の管理」を強化することにこそあったのではないかと思われるのである。

この制度にゴーサインを出した中教審も「我が国全体の資格制度や公務員制度との比較において、教員にのみ更新時に適格性を判断したり、免許状取得後に新たな知識技能を修得させるための研修を要件として課すという更新制を導入することは、なお慎重にならざるを得ない」、と教員免許更新制に否定的だったはずである。

しかし、政治の力が無理押しするようにして、これを制度化してしまったことは周知のことである。

この免許更新講習は、「こういう内容で講習をすれば、教員の資質が確実に上がる」という展望があつてのものではない。「教員の資質向上」という政治目標が優先され、形式的にでも講習を実施することそれ自体が目的として慌ただしく実施されたものである。

かつ、その内容は大学に丸投げすることになった。現場の課題を肌で感じている人たちが講習を組織しているのではない。この制度の目的を是として考えたとしても、それに見合つた講習になるかどうか危ぶむ声があちこちで聞かれたはずであるが、それを無視してこの四月から実施されてしまった経緯がある。

そして、案の定その実施に関してさまざまに問題が起きてしまったことは周知の通りである。

各地の大学でインターネットによる受講予約システムに不具合が生じて混乱が起きたり、回線が混雑して予約するために終日コンピュータの操作に専念しなければならなくなつたりするなど、受講できるかどうかの保障もなされていないこともその一つである。

そしてさらに決定的なのは、定員割れが続々と明らかになつたことである。

当初からの懸念通り、すでに現場のプロになつている人たちに、「受けることができて良かった」と思つてもらえ、教員としての資質の向上に貢献できる内容で講習を構成しようと大学が真剣に考え、対応できるだけの検討時間がないまま実施に踏み切つたことが原因だ。

定員割れは専門性が高い講習で特に深刻で、「学問」重視の大学側と「現

場対応」重視の教員側のニーズとのズレに、講習内容の見直しを求める声が出ていることから当然である。

具体的には、「素粒子物理学の発展」（弘前大）や「社会学に関する学問の歴史」（群馬大）など、専門性が高かったり特定教科に特化したもので、申込者はゼロく数人という有様で、これらは中止になっている。

これに対し、カウンセリングや発達障害など、教員が教育現場で対応を迫られている講習は、定員の9割を占めるほどの好調ぶりだという。

実施上でも幾多の問題を抱えた「教員免許更新制度」であるが、何よりも排除の論理を基調としたこの制度の設置自体に問題があるととらえるべきで、これを見直したからと言って「教育改革路線の後退」ということにはならないし、そもそも安倍元首相と中山文科相（当時）の打ち出した教育改革そのものが「改革」を標榜するにふさわしくないものであったという二重の意味で、一日も早く見直し廃止すべきものでしかないのだ。

その意味で産経新聞の記事の論調は、教育の望ましいあり方を見据え、まっとうなものにしていくとする姿勢が希薄なものであるとしか思えないのである。

(2009/09/14)

「学習観」の貧しさ

新聞やテレビの報道によると、『全国学力テストの結果公表を巡り、文部科学省が都道府県教委からの要請があっても、データ提供をしないとの方針を決めたことについて、大阪府の橋下徹知事は16日、「感心しますよ、このバカさ加減には。不思議な世界ですね、霞が関は」などと批判した。』という。

テストの結果を公表すること、またそのことによって学校を、子どもたちを競争に駆り立てることが学力テストの目的ではないにもかかわらず、結果の公表に否定的な文科省の姿勢をバカと決めつけ、挙げ句の果てに『文科省は大臣以外の官僚は全員入れ替わった方がいい』とまで言い放ったともいう。(産経新聞)

この人の学習に対する考えは、「他人と競い合わなければ学力は伸びない」という思いに縛られているようで、この人の歩んできた「学習の歴史」の貧しさが思いやられる。

人が成長するのは、「競争」に大きく依存するものではない。

「他との競争」がなければ自分の学問的な成長がなかった、というのであれば、それは学問の対象への理解を深め、そのことによって更に新たな課題に気がつき、ますます世界を広げていくといった「学問的な成長」ではなく、単に他との競い合いに勝つ(あるいは負けない)手段を身につけることを勉強の目的としていたからに他ならない。

学習の目的と成果を、他人に勝つか負けるかなどといった次元で論じること自体が学問をおとしめることであるし、学問に対する姿勢そのものが貧困であると言わざるを得ない。

先頃ノーベル物理学賞を受賞した京都大名誉教授の益川敏英氏が『ノーベル賞をもらうために物理をやっていたんじゃないやなくて、面白い問題があるから寝ずにやってきた』と述べておられるように、対象それ自体のおもしろさに魅かれ、強い憧れをもって取り組んだ結果が見事な成果として実を結んだのであって、他の研究者と競い合うことや他に先んじて何かの賞を獲得することをねらって研究に取り組んできたわけではないことは論を待たない。

同氏は『科学にロマンを持つことが非常に重要。あこがれを持っていれば勉強しやすいが、受験勉強で弱くなっている』といたずらに競争をおおりに立てる現在の教育についての状況を批判しているが、それもこうした研究に對

する基本的な考えがあるからであろう。

橋下知事とは対照的に、対象のおもしろさに目覚め、自己の成長のうれしさを綴った子どもの詩に出会った。先日の読売新聞【こどもの詩】に掲載されていたものである。

キャッチボール

渡辺裕斗

ぼくは いいボールを投げた
お父さんもいいボールを投げた
ぼくは カーブを投げられるようになった
スライダーも 投げられるようになった
いいボールをまた投げたいなあ
お兄ちゃんとやったときも
いいボールを投げた

「こどもの詩」

読売新聞12月7日(日)

この子は、試合に勝つためにボールを投げているのではない。
いいボールを投げることに、それ自体を目的とし、それ自体を楽しんでいるのである。

カーブもスライダーも投げられるようになった。

キャッチボールの相手をしてくれるお父さんもいいボールを投げてください。

またいいボールを投げてみたい。

いつも思い通りのいいボールが投げられるようになったらいいだろうな、と懂れているのである。

その思いはお父さんやお兄ちゃんに「負けたくない」という思いに後押しされているのではなく、お父さんやお兄ちゃんというボールの投げ合いをして楽しくキャッチボールができたらいいな、という思いを背景にして、徐々にそれに近づいている自分の成長がうれしくて、その喜びが詩となって

表されているのだ。

子どもですら「対象のおもしろさ」に目覚め、その対象に深くかかわることと自分の世界が豊かに広がることに喜びを感じ味わっていて、それが「学びの本質」であることを自覚しているかのようである。

それに比べれば、単に競争の「結果」のみを追い求め、そこでの伸びがなければ学んだことにならないとする橋下知事の「学び」に対する考えと理解の程度は、あまりにも浅薄であるとしか言いようがない。

この人は、幼い頃からそうした貧しい考えと目的意識で勉強に取り組んできて、学ぶことの「本当の喜びや妙味、楽しさ」を味わうことなく競う技術を鍛え身につけることに血道をあげてきたのであろう。

そうした浅薄と言えばあまりにも浅薄な学習についての基本的な理解が「クソ教育委員会」「バカな文科省」という品のない発言に結びついているのであろうことは想像に難くない。こうした人にこそ、もっと豊かな学びの世界があることを知ってもらいたいものである。

それはすなわち「わからないこと、未知なこと、今はできないこと」に心をときめかせ、時が経つのを忘れるほどに夢中で取り組んでしまうことの楽しさや、障碍にへこたれず額に汗して粘り強く取り組む心の弾み、克服できたときの喜び、そしてまたやりおさせることができるかどうかの保障はないが、ついつい克服してみたいと強く思える対象を持つうれしさを実感できる世界がある、ということである。

(2008/12/18)

ほんとうの学力を

国際学力調査 (PISA) で、上海が読解力、数学的応用力、科学的応用力の3分野のトップを独占したことについて取り上げた読売新聞のコラム「編集手帳」によると、地元メディアの評価は「驚くほど冷静」だという。

政府系の新聞は『得意になるのではなく、弱点を克服して改革を進めよ』と書いているし、大衆紙も「必ずしも誇るに値しない」との見出しで『知識教育、受験教育の結果に過ぎない』という大学教授のコメントを紹介しているという。

的を射た指摘による報道である。

編集子は、背景に受験戦争の過熱、行き過ぎた詰め込み教育の問題があるようだとし、それはかつて日本も経験した深刻な社会問題でもあったはずだと指摘している。

しかし、残念ながら日本はかつての経験から学ぼうとはせず、むしろそこへ帰っていかうとしているようである。「覚えること」「習うこと」を重視し、それこそが「学習」であるといわんばかりに強調し、そのためには学習内容と授業時数を増やすことこそ重要だという方向に大きく舵を切ってしまった。

上海の冷静な「教育観」と比べると、あまりにもお粗末など言って良いほどのヒステリックでかつ低次元な「学力向上論」が世を覆い、雪崩をうつつように学校教育が「学習塾化」しようとしている。

これは、教育にとって決して望ましい状況ではなく、「見方・考え方・取り組み方」を身につけ、真の知性の育ちや確かな自己の確立という「人間の育成」に貢献できる教育の実現にはほど遠いものと言わざるを得ない。

覚えることに終始し、学校で優秀な成績を修めたと思われる我が国の指導者層が、山積する重要で解決困難な問題を前に逡巡し思いあぐね、挙げ句の果てに確かな手を打てずに右往左往する姿、解決の方策も見いだせずさまよいかの如き姿を見るにつけ、安易な「学力論」に立つ教育観の欠陥と誤りを裏付けるこれほど強力な証左はないとつくづく思わされる。

今からでも遅くはない。ほんとうの知性とはどのようなものか、そこに至る教育とはどのようなものか、豊かな情操やしつかりした見識を身につけ、成熟した市民としての人間の育ちに貢献できる教育内容や方法はどのような

ものか、といったことについて見直し、冷静に議論を展開し、考えを深めなければなるまい。

それは決して、準備された唯一の正解を覚え、ペーパーテストで高い得点を取ることを学習の目的とし、受験術を身につけることを主眼とし、試験が終われば「忘れてしまっても良い」知識を得させることが「教育」だとするような議論にはつながらないはずである。

PISA で求めていることが、学習によって身につけた学力を、どう今後の学習活動や日常生活に生かすかという能力リテラシーであり、そこで大切な働きをするのが「見方・考え方・取り組み方・表現力・読解力」であるとしているのに対し、相変わらず「どれだけ覚え、正解を出せたか」という結果にしか目が向かず、世界ランク〇位になれた、あるいは落ちたと一喜一憂する姿は、教育に対する考えの「底の浅さ」を露呈するものでしかない。

ここは、上海の冷静で落ち着いた対応に軍配を上げたいところである。

(2010/12/12)

秋葉原の事件に思う

先週の日曜日(2008/06/08)の白昼、秋葉原の歩行者天国で無差別殺人を犯した犯人は、事件当初から「小中学校を優秀な成績で過ごした、スポーツ万能の子どもだった」と報じられてきた。

しかし、青森県内でも有数の進学高校に入学してからは成績が低迷し、ほとんどの生徒が4年制の大学に進学する中、短大に進まざるを得ないほどに様変わりしてしまった、とも報じられている。

短大に進学した後、教員になることを欲し、4年制大学への編入を希望したがそれは叶わず、短大に於ける勉強もおろそかになり、そこで得られるはずだった「二級自動車整備士」の資格も棒に振っていたとのこと。それは国家試験で実技が免除される「実車実習」を受講しなかったためだという。

聞けば、両親とも過剰なほどに教育熱心で、加藤容疑者のネット上の掲示板への書き込みに寄れば『親が書いた作文で賞を取り、親が書いた絵で賞を取り、親に無理やり勉強させられていたから勉強は完璧』だった小学生時代を送り、『中学生になった頃には親の力が足りなくなって、捨てられ』、自信も意欲も喪失してしまった中学・高校時代の様子が語られている。

『中学では小学校の「貯金」だけでトップを取り続けたが、県内トップの進学校に入って、あとはずっとビリ。高校出てから8年、負けっ放しの人生。自分で頑張った奴に勝てるわけない』と吐露するほど、自分の力で勝ち取ったものではない。『成績のもろさ』からくる自尊心の喪失が窺える。

成長を「よい成績をとること」と勘違いしてしまった両親の過った教育観は、作文や絵画を肩代わりして書く(描く)という行為に如実に示されている。それが我が子の実力の伸びと結びつかないことなど、どう考えてもわかるはずなのに、「賞をとること」「よい成績をとること」が学習の成果だと短絡的・近視眼的にとらえて指導し続けた挙げ句、実力に結びつけることができずに、しかも「負の成長」に追い込んでしまった様子が見て取れる。

「正解を教えること」が指導だと錯覚したこの母親は、加藤容疑者が中学に進み、自分が正解を示すことができなくなったとき、「教えること」を放棄せざるを得なかったのだろう。

自力で学ぶことを知らずに育った加藤容疑者にすれば、それは「捨てられた」と実感することであり、『もう取り返しがつかない』『何をやっても無駄』という無力感の獲得に結びついたであろうことは容易に想像がつく。

そう考えてみると、この場合、親の教育に過ちがあったとしか思えない。単に成績のことばかりでなく、彼自身の「耐性のなさ」や「自立の構えの欠如」も目につくことから、人間としての成長を棚上げした教育のありようの問題があったのだろうと思われる。

派遣社員として茨城、宮城、青森、静岡など、各地を転々としたとも報じられている。派遣社員という不安定な位置から脱却したいという理由からばかりではなく、『この仕事は自分の望む職種ではない』ということを実にした姿勢も大きく作用しているようだ。それは、採用時は派遣社員であったものの、数ヶ月後には正式社員として採用された青森での食品運送会社をあっさりと辞めてしまったことから窺える。

いったい世の中に「自分のしたいこと」と職業が完全に一致している人間などそう多くはないはずだ。中にはそのような人がいるかも知れないが、それは希有な例で非常に幸せな人であるには違いない。だから、そうなれなかったからといって「不幸さ」をかこつてみたり、『自分は社会から見捨てられた』と自暴自棄になることはないのだ。

彼自身の弱さ、成長の未熟さばかりが浮き彫りになるが、だからと言って彼を取り巻く社会に問題がなかったとも言いきれない。

競争の原理に基づく利益優先の社会が見境のない「規制緩和」を求め、その規制緩和がいっそう人々を競争に駆り立て、安い人件費を求めて派遣という特殊な雇用状態を蔓延させ、ワーキングプアと呼ばれる浮かび上がれない人々を生み、格差をいっそう押し広げている現状も大きな問題であると思われるからである。

「格差はいつの時代もあるのであって、格差を全くなくすことは不可能」、「努力した人が報われる社会をつくっていく、汗を流した人、頑張った人が、知恵を出した人が報われる社会をつくっていくかなければいけない」として再チャレンジを提唱した安倍首相の言は、逆に言えば「(非正規社員である)あなたが正規社員になれなかったのは、社会が悪いのではなく努力しなかったあなたが悪いのだ」と言っていることに他ならない。

新自由主義という弱肉強食の原理に基づく経済優先の社会にあって、費用対効果を何よりも大切にする企業が人件費の高くつく正規社員を増やそうとするはずがないことは目に見えている。

そうした中で加藤容疑者もがいていたともとれる。

また広がる格差社会の中で、浮かび上がったかどうかということをもってして、一元的に「勝ち組・負け組」と評価し合うような短絡的な人間の見方が支配的な浮薄な現代社会も、大いに問題なのではないかと思われる。

加藤容疑者自身が自分を負け組と規定し、「勝ち組はみんな死んでしまえ」「希望のあるやつらには俺の気持ちなんかわからない」と自暴自棄の心情を吐露したのも、そうした風潮を背景にしていることは疑いようがない。

自己愛と現実の自分の姿の間の埋めようのないギャップが、「負け組」という見方でいっそう惨めにさせたのかも知れない。何と言っても小学校時代は優秀な児童だったのだ。その自分が『なぜ』という思いに駆られても不思議ではない。

こんなところにも彼の「甘え」「弱さ」「未熟さ」が感じられるが、それにしてもしもこうした浮薄な風潮が支配的な社会に幼い時から身を置いてきた若者であることを考えると、彼ばかりを責めることもできないように思われてならない。

そうした社会のありようを許してしまったのは、私たち一人一人だからである。

そう考えてみると、加藤容疑者が彼自身の身勝手な理屈で死に追いやってしまった七人の犠牲者の方々、十人の怪我を負わされた方々は、こうした問題を抱えた社会と、そしてそれを背景とした教育の至らなさによって犠牲に追いやられたとも言える。

こうした理不尽な事件が起こらないよう、そして何の関係もない人が無念の死に追いやられてしまったり自由を奪われたりすることのないよう、社会が「よさ」に向かって成熟すること、そのために教育が望ましい貢献を通して市民の成長に寄り添えるようになることがどうしても必要だと痛感するのである。

このように考えてみても、未だ釈然としないのは、人の生命を奪う行為がなぜこんなにも軽々とできてしまうのか、ということ。身勝手な理由のために将来を奪われてしまった人々や残されたご遺族・友人の無念さと悔しさを思う時、その疑問はやり場のない怒りと共になおいっそうつのる。

こうした理不尽な事件があまりにも多すぎ、暗澹とした気分させられるが、台風や地震などの自然災害とは異なり、人間が引き起こすところの「人間が主たる原因」「人間の考え方や生き方が主たる要因」の事件であることから、手の施しようがあるかも知れないと考えると未だ救いがありそうであ

る。
そこそこ教育が関与する意義と余地があるとつくづく思うのである。

(2008/06/15)

学習に背を向ける子どもたち

このところ小学校高学年の児童とふれあう機会があり、何度か接するうちに「これはどうしたことか」と考えさせられる事態に遭遇した。

それは、彼らから子どもらしい「ひたむきさ」や「明るさ」が感じられない、ということである。彼らに接したのは学校の中、しかも学習中のことである。

小学生とは思えない気怠そうなその様子からは、学習を「我がこと」としてとらえ、他ならない自分の成長のためにこの機会がある、と前向きに認識している姿とはほど遠い取り組みの姿勢しか窺えなかったのである。

『昔の子どもだって、学習にそんなに積極的ではなかったではないか』と自問してみるのが、そう考えても違和感を拭えない。かつての子どもの消極性とは、問題の所在そのものが異なるところにあるとしか思えないのである。

かつて学習に消極的な子どもたちはいた。しかし、好奇心を刺激するなり、問題意識に働きかけることのできるような投げかけをすれば目を輝かせたし、がんばろうと試みることで子どもが多く見られた。何よりも「知らない」「できない」「ことを恥じたり、意欲的になれない自分を省みたりする傾向があったからである。

しかし、いまの子どもたちの気怠そうな様子からは、消極的というのではなく、むしろ積極的に「学習を忌避する姿」が窺えるのだ。「知ること」「わかること」「できること」は意味のないこととして無言で主張し、がんばることを恥じる様子すら見えるからだ。

そうなってしまった原因はさまざまなところに見いだせるかも知れないが、その一つに今の子どもたちの多くが学習に「利」を求め見いだそうとしている気配がある、ということが原因の一つとして考えられる。

学習して知識を獲得したところで、何か良いことがあるのか。がんばって取り組みれば、何か得なことがあるのか。

真面目に勉強などしたら、却って友だちに嫌われるという不利益を蒙るのではないか。

こうして教室の机の前に45分間坐るといふ苦役に耐えているからには、何か褒美がもたらえて良いはずだ。しかし、何ももらえないではないか。

子どもたちはしきりに「わからない」を口にする。

しかし、それを困ったことと感じている様子は窺えないし、「わからない」のではなく「わかろう」としていない様子すら窺える。

わからないのは自分のせいではない。むしろ自分にとって利のない、意味のないことを教えようとしている学校が悪いのだ、とでもいうようだ。

分からないことそれ自体が自分にとってさほどの問題ではない。なぜなら、知識のない人間がマスコミでもてはやされ、有名人（彼らにとっての有名人とは芸能人やスポーツ選手などである）であることに知識や知性は不必要ではないか。

学習に真剣に取り組むには、粘り強さや不断の努力が欠かせないが、そんな努力をせずともあんなに有名になれるではないか。

有名になれないまでも、多くの人がそこそこ生きていけているではないか、と費用（努力）対効果（利）を勘案して易きを選択し、成長への努力を拒否して底流にとどまろうと努めているのだろう。

これは推測でしかないが、各家庭では勉強することは将来よい大学に入学するためであり、それはまたよい会社の社員や官僚となって高い収入を得、安定した生活をするためのものだ、と学習の意味を現世的な利益と結びつけて説明しているのかも知れない。

そうした説明で説得するのは親にとっても子どもにとってもわかりやすいことであろう。しかしそうした説明は、現世的な利に直接つながりそうもない、つまり試験とは関係のなさそうな学習内容を「無意味なもの」として意識させることにもなる。

だから子どもたちは、そうした内容には積極的に「忌避」の姿勢を示すのだ。

人間は元来、わからないことに出会うと不安や焦燥を感じ、何とかそれを解消しようとして問題解決の行動を起こそうとする。そうした究明の行為から学びが生じるのだが、ここで話題にしている子どもたちは「わからないこと」に不安を感じていないかのようである。

不安を感じれば解決行動を起こさなければならない。そしてそれは一方では努力という「がんばり」を發揮しなければならぬし、「がんばること」はもう一方では「自分の力のなさや無能さ」を認めざるを得ない結果を生むという危険性も孕んでいる。

そんなところに自分を追い込むのはごめんだ、とばかりに精一杯バリアをはって「わからなくてもそれは問題ではない」のだと自分自身に言い聞かせ、学ぶことに背を向けることに努めるのだ。

そうしたことが小学校入学時から続き、「ついついわからうとしてしまう心の動き」にも蓋をし、わからないことに出会ってときめく「心の弾み」にも気づかぬふりをしているうちに、目の輝きを失ってしまったのではないか、と思われてならない。

学力の低下が叫ばれたことを受けて、指導内容や授業時数を増やす対応がとられているが、問題はそんな小手先の対処では解決しないであろう。

指導内容を増やし、一生懸命「教えよう」としても、わからうとしない子どもが相手ではその努力は空を切るばかりだろう。

子どもたちが、「わからう」「知りたい」という人間が本来持っている知的好奇心とそれにもとづく知への欲求がむくむくと動き出し発露するような教育のあり方を考えなければ、根元的で本質的な対処にはならないはずだ。

要諦は子どもたちが「学習への意欲」を取り戻せるよう、「知識の獲得」以上に大切な「学びの意味」をわかってもらえるような教育観や学習観を大人が持つことにあるのだ。

それは断じて「現世的な利」と結びつけて説明されるべきものではないはずであり、そのような次元で論じられるべきものでもない。

そこから再スタートしなければ、日本の教育は壊れていく一方で、安易な「学力増進への対策」ではますます学習放棄・忌避に子どもたちを追い込むばかりなのではないかと思われてならないのである。

(2008/05/25)

学ぶ目的

広辞苑によれば、常識とは『普通一般の人が共通して持ち、または持つていなければならないと考えられる知識・道徳・意見または理解力・判断力』のことだという。

また新明解国語辞典には『健全な社会人なら持つているはずの（ことが要求される）、ごく普通の知識・判断力』と記されている。

社会の変化や発展に応じて、常識とされることごらの内容は変わることもあるだろうが、人口に膾炙している諺などは、知っていて当然と思われることから、ごく常識的なことがらととらえて良いであろう。

先日のこと、ある著名な精神科医がテレビのクイズ番組に出ているのを見かけた。

東京大学医学部を卒業したという彼は、『学力崩壊』『大人のための勉強法』『受験は要領』『英語脳の作り方』『キャリアアップ力』『勝ち組女の成功術』『小3までに勉強癖をつける法』『能力を高める受験勉強の技術』『必ず得する大学・学部選び方』など、心理学、教育問題などについての著書が続々と出版しているので、名前を聞けば「あゝ、あの人か」とすぐわかる人物である。

これだけ教育問題に関する著書を書き上げる人物であるから、常識的な諺の問題などはほとんどパーフェクトに答えられるであろうと期待していたのだが、予想に反して正解数が低かった。ひよっとすると、その時の出場者中、（諺の問題に関して言えば）最も成績が悪かったのではなからうか。

もちろん、諺の中には日常使用しないものもあり、はじめて耳にする諺の中に改めて古人の事物・事象に対する炯眼に驚かされるといったこともないではない。しかしこの時に出題されたものはほとんどが小学生でも知っているような、知っていて当然のような日頃言い慣わされている諺ばかりだったのである。

であるにもかかわらず、そんなものすら『聞いたこともない』と彼は言う。

彼の著書のタイトルを見てもわかる通り、彼が書いていることの多くは、「術」であり「要領」であり「方法」である。

これらのタイトルから想像するに、まるで学習（あるいは勉強）をするのは、勝ち組になる、すなわち「得」をするためにすることであり、しかもそ

れを実現するためには受験技術という要領さえ身につければ良いのだ。そしてそれが「学力」だと言っているかのようでもある。

技術や要領だけで受験を切り抜け、名門大学出身者という肩書きをもって社会で相当の地位を得ること、それが人生の成功者であると確信している人物であるとすれば、世の常識をもって人間について考えたり生き方について思索したり、真摯に人と語り合ったりする、あるいはそのことを通して自分を見つめるということがなかったのかも知れない。

学ぶことを通して、「見つめ・考え・判断」するというすこぶる大切な作業をないがしろにし、ひたすら「要領よく覚え、解答のコツを身につける」ことに意を用いてきたらしい姿が思い浮かぶからである。

諺を知らないからと言って、非常識と判断することも危険ではあるが、多くの人が知っていて当然だと思われるようなことがらを知らない人物が、他人に「Know How」を語る資格やものごとの本質について論じる資質があるとも思えない。

もつとも「問うことを学ぶ」という学問の神髄に触れ得ずに、「術」と「方法」「要領」で世を渡ってきた人物が、学ぶことの楽しさや喜びを語れるわけもなく、人間の機微に触れるときめきや感動をもとになにごとかを語れるはずもない、というのも当然と言えば当然のこととは言えるのだが。

もつと問題なのは、彼が教育についてどう考えているか、ということである。

自分の取るに足りないとも言える成功体験だけをもとに、学習の目的や学習方法について、すこぶる偏った考えに拘泥し、それをもとに「教育」を論じている点である。

それは科学的な態度であるとは言えない。

まずもって学習活動は単に「要領」でもってすることではないし、ましてや学習の目的は自己を利するためにすることでもないことは自明のことである。それが基盤になれば、教育について論じることなどできない。「調教」や「訓練」といった教育とは無縁のことながらについて論じるのであればまだしも、学習の本質とはかけ離れた「術」や「要領」について語り、それが教育論であるかのように主張するのは、大いなる混同あるいは勘違いであるとしか言いようがない。

なぜ学習をするのか、という学習者からの予想もしない思いがけない問いに戸惑った挙げ句、答えに窮して『あなたにとつて得になるからだ。ここでしておかなければ、大いなる損をすることになる』といった類の現世的な利

益をエサにするかのような答えは、学習者にとって、あるいは学習を考える上で「まっとうな答え」にならないことは言うまでもない。

しかし残念ながら、現在の日本は彼の著した何冊もの書物がそうであるように、そうした「利」で人間の行動を促そうとする風潮に覆われているように見受けられる。

それこそがモラルを低下させ、士気を失わせている原因であり、いま日本で起きているさまざまな問題の根にあることを考えれば、何よりも個人主義と利己主義を混同し履き違えたそうした動きに歯止めをかけなければならぬのは言うまでもないことである。

頼もしい市民として一人一人が成長し、生きていくためにも、「勝ち組・負け組」という意味のない一元的なモノサシで人間を見る見方から脱却しなければならぬし、そんなことのために問いを發し学ぶのではない、ということをおぼえてもらおう努力を怠ってはならないであろう。

(2007/05/13)

教育は誰のためのものか

日本が明治維新を経て近代国家に生まれ変わるにあたり、何よりも急がれたことは学制を布くことであった。

そこで柱とされたのは、大久保利通の著した「政府ノ体裁ニ関スル建言書」(1869)にある『マズ無識文盲ノ民ヲ導クヲモッテ急務トスレバ、・・・教化ノ道ヲ開キ学校ノ制ヲ設クベシ』という一文で明らかのように、「無識文盲」の国民を「教化」するという論理であった。

大久保が国民を「無識文盲の民」と見、「教化」することが国家の政治上の大目的であるとした考えは、その後の伊藤博文やその内閣で初代文部大臣となった森有礼へと受け継がれ、それがその後もそのまま歴代政府に踏襲されて、やがて日本の教育政策の体質とまでなったと言われている。

それは、教育が「国家のための」「国家による」「仕事と考えられてきたことを如実に表している。

それに対して、当時の日本が目標とした西欧圏の諸国では、教育は人間としての個人のためのものであると考えられてきた。決して国家のためではなく、あくまでも人間の生活のために教育があると基本的に考えられてきたのである。

大学ですら、日本では官立のものが国家の事業として(司馬遼太郎の言葉を借りれば)「学問と文化の配電盤」の役割を持つものとしてつくられた経緯があるが、西欧における大学誕生の経緯はまったく事情が異なるようだ。それは次のようなものであるという。

しかしよく考えてみると、学問の自由とか、自治とかいうものの根と
いうか、起源というか、それは例えばドイツの田舎町でむかしむかし
法律に詳しい先生と、内科学に詳しい先生と、それに建築に詳しい先
生とが三人、軒をならべて塾を開いている。

それぞれポケットマネーを出して助教授や助手を雇って学生を教えて
いる。そういうところへ教会からの圧迫もときにはあり、国王からの
圧迫もときにはあり、そういうものを当然はね返したりしなければな
らない。

そこで学塾の親方衆が集まって教授会をつくった。

教授会で代表を一人選び、それを学長にした。やがて何軒かの学塾が

一つになって、大学ができあがってゆくわけでしたらう。
だから大学の自治も、大学の自由も、そういう学塾の親方衆の学者
生活の必要から生まれたもので、日本にゴソツと輸入された時には、
それが単に観念になってしまった。

*****(司馬遼太郎「歴史を動かす力」文春文庫 pp.66)*****

大学ですら学問と市民のために自然発生的に生まれたもので、大学を守る
ための組織や理念も「必要」から生まれたものらしいことがよく窺える。

日本でも江戸時代に隆盛をきわめた学塾や寺子屋なども、国の政策として
設けられたものではないという意味で「自然発生的」なものだと言える。

寺子屋は一説では全国に5万ヶ所以上あったと言われており、現在のコンビ
ニエンス・ストアのように庶民の身近な「学習の場」として全国津々浦々に
存在し、市民の学びを支えてきたようである。

寺子屋のおかげで、江戸時代の市民の識字率は他の諸外国を圧して高く、
いわば町民学問とでもいうべきものが盛んであったと言われている。明治に
なって学制が布かれてもスムーズに導入が図れたのも、そうした下地があっ
たからで、このところ江戸期の教育、とりわけ町民の学問の手ほどきをした
寺子屋について見直す動きが起きているのも、そうした事情と無関係ではな
いだろうと思われる。

NHK教育テレビ、「知るを楽しむ江戸の教育に学ぶ」では次のよう
に紹介されていた。

寺子屋への入学時期や入学年齢、修了時期や在学期間も子どもによって
まちまちなら、指導方法や教科も師匠によって異なりました。

ふだんは子どもたちが黙々と手習いを練習する自習形式が中心で、時々、
テキストの読み方などを個別に指導したり、一斉指導を行いました。

(中略)

寺子屋教育は制度ではありませんから、画一的な近代学校制度とは全く
異なります。

例えば、貧しかったり、親の考えから、寺子屋に通いたくても通えない
女子が、農作業の休憩時間に寺子屋の後方にそっと座って師匠の講義を
受けるようなこともありました。また、貧家のため通学できない子ども
が師匠から手本だけを書いてもらい、子守りをしながら地面に字を書い

て学んだところ、寺子屋に通学する寺子たちより優秀だったという話もあります。

このほか江戸では、良家の娘や奥女中が師匠にお手本を書いてもらい、自宅で練習し、時々清書を持参して指導してもらう通い弟子や、豪商の主人や寺院の住職に招かれて出張指導する「出稽古」というスタイルも見られました。中には、わざわざ小田原や静岡の子弟が、飛脚を使って手本や清書のやりとりを行いながら江戸の手習い師匠から指導を受けるという通信教育を行った寺子屋もありました。

このように、学ぶ人が学びの主役であるという寺子屋のありようは、教育作用の自然なありようそのもので、「国家が国家のために」制度を整え画一的に一定の知識や技術を教えるという教育の論理は、明治期から戦後日本国憲法が發布されるまでの間の「特異な」姿でしかないといえることができる。

第二次世界大戦後の新憲法発布およびその精神を強く受け継いだ教育基本法は、世界に誇るべき高い理念を掲げた、それゆえに侵しがたい立派な法律であった。

その平和憲法下での教育基本法が「普遍性」を謳ったものであるのに対し、新しい教育基本法ではその文言が消され、『公共性、徳』といった現実に目を向けた文言が目を引く。

さらに新教基本法でもう一つ特徴的なのは、国民を教育の「主体」としてではなく「対象」としてとらえようとしている姿勢が窺えることである。

それはまさに、明治期から戦前・戦中にかけての「国家のための国家による教育」に回帰してしまっただけである。

それが教育にとって望ましいものであるかどうか、自然でごく当然な教育の姿であるかどうかは、これまで見てきたことで明白である。

教育を『不当な支配に服することなく、国民全体に対し直接に責任を負って行われるべきもの』とし、望ましい教育の実現に向けて環境を整備する理念を謳った従来の教育基本法に対し、新教基本法では『公共の精神を尊び、豊かな人間性と創造性を備えた人間の育成を期するとともに、伝統を継承し、新しい文化の創造を目指す教育を推進する』の「教育を推進する」の文言に表れているように、いま現在、（為政者が）必要だと考えている内容の教育をこれから将来にわたって推進するということを表明しているのだ。

教育の主体を国民一人一人と位置づけてきた従来の教育基本法では、その

教育が望ましく展開されるための「環境整備」を主眼としてしていることから、「方針」という到達点（めあて）を設けない言い方で表現している。

一方、新教法では、教育されるべき対象としての国民がどれだけ到達点に近づけたか、また近づくような教育を施すことができたかというめじるしを設ける意味で「目標」という言い方をしている。

達成目標を設け、その目標に到達できたかどうかで、実践の価値を測ろうとする考えそれ自体が競争を旨とする新自由主義の考えそのものだが、教育がそうした考えにそぐわないことは言うまでもない。

市場原理を教育に持ち込み、それを「望ましい」として強制すること自体が教育の原理について理解できていない何よりの証だ。

繰り返すようだが、国民一人一人は「教育を受ける権利」を有してはいるが、「教育される義務」を負ってはいない。何を教え込むかなど為政者の恐ろしい傲慢さがここでも浮き彫りになっている。

教育は、（かつて大久保が論じたように）国家の都合で国家のために施されるべきべきものではなく、教育を受ける権利を有する国民一人一人の学びを保障するものとして行われるべきものであり、何よりもその意味で新教法は「教育の国家による支配」というゆがんだ性質を色濃く持ったものであると断ぜざるを得ない。（ここまで、「新しい教育基本法」「新教法」という云い方をし、改正された教育基本法と呼んでいないのは、それが正しく改められたという意味の「改正」であると筆者が思っていないからである）

60年前、教育刷新委員会が教育基本法の案を検討した際には、40人もの専門家が長い長い時間を費やし、基本理念から草案の表現一つ一つに至るまで議論を尽くしたという。その記録は『教育刷新委員会教育刷新審議会会議録』として公開されてもいる。

南原繁（元東大総長）は、誠意を尽くした議論の果てにできたこの教育基本法について次のように語ったと言われている。この稿の最後にその言葉を示して、その理想の高さを改めて再認識したいと思う。

新しく定められた教育理念に、いささかの誤りもない。

今後、いかなる反動の嵐の時代が訪れようとも、何人も教育基本法の精神を根本的に書き換えることはできないであろう。

なぜならば、それは真理であり、これを否定するのは歴史の流れをせき止めようとするに等しい。

ことに教育者は、われわれの教育理念や主張について、もつと信頼と自信をもつていい。そして、それを守るためにこそ、われわれの団結があるのではなかったか。

事はひとり教育者のみの問題ではない。

学徒、父兄、ひろく国民大衆をふくめて、民族の興亡にかかわると同時に、世界人類の現下の運命につながる問題である。

教育はもともと政治とは無縁の独立したものでなければならず、ときの為政者のそのときそのときの思いつきや都合で左右されてはならないものである。だからこそ、従来の教育基本法は憲法と同等の侵すべからざる高い位置を与えられてきたはずだ。

高々とした理想と理念を謳った教育基本法が「改正」と称して書き換えられてしまったことは残念であり、日本の将来の子どもたちに対して禍根を残す日本の教育史上、悲しむべき出来事だと言っても過言ではない。

何よりも学ぶ権利を有するのは国民一人一人であり、断じて「教育を受ける義務」を負ってなどいないのだ。

その意味で、これが教育の根幹にかかわる大問題であることを私たちはもつと自覚しなければならぬと痛感するのである。

(2011/02/21)

見極める目を

昨秋は、ラニーニヤや夏の猛暑の影響でサンマが記録的な豊漁であった。そうしたニュースが報じられる度に、マスコミの過激で煽動的な報じられ方に『いかななものか』という不快な感想を禁じ得ない。多くの報道番組が一斉に、「魚が品薄」「マグロが、鯨が食べられなくなる」「イカが、アジが何円値上がりした」などと切羽詰まったような調子で報道するからである。ある魚が品薄になったといっても、ほかの魚が食べられなくなるわけではない。鮮魚は望めなくても、干物があるではないか。マグロが食べられなくても、サンマや鰯があるではないか。マスコミの報道を見ていて思うのは「いたずらに市民を煽るな」ということであり、そのようなマスコミに煽られずに落ち着いた対応を市民にはして欲しいということである。

飽食の時代にあつて、空腹を満たすことができる、ということに対する「ありがたみ（感謝の気持ち）」が希薄になってしまい、ものの味を本当に知ってか知らずか「ブランド」や「形」「規格」をありがたがる風潮が、かつての船場吉兆や飛驒牛、比内地鶏、ウナギなどの産地偽装、ごまかしを生んだ背景にあることを肝に銘じなければならぬ。

マグロが食べられなくなったからと言って慌てふためかず、「それがなほどのことがあるう」とゆったり構え、じつくりと対策を考慮することのできる市民とならなければ、安易な手段で手っ取り早く対策を講じ、将来ますます自らを苦しめていく道をたどることになることは想像に難くない。

もうずいぶん前から、スーパーマーケットで売られる野菜の規格化は進み、曲がったキュウリ、色の均一でないキュウリなどは店頭には並ばないという。キュウリに限らず、ありとあらゆる食材が均一の顔つきで店頭に並んでいる。日本人ほど、その中味とかかわりなく「形、大きさ、色」といった外見に注文をつける国民はいないようで、それすらも外国との競争で「買い負け」している最大の要因になっているとも言われている。それだけではない。そうした「いわれのない要求」に応えるために使わなくともよい農薬を使わざるを得ないと嘆く生産業者もいるという。

ちよつと虫が食っていると言つて購入を控える客がいれば、スーパーマーケットではそうした商品を仕入れることをしなくなり、生産業者に「虫の食っていないものを」と要求する。そのために「虫も食わない野菜づくり」をめぐり農薬を使わざるを得ない状況に追い込まれるということは容易に想

像がつく。

外国からの輸入に頼っているさまざまな食材について、わがままな要求をつきつけてきた日本だが、ヨーロッパやアジアの各国は、そうした要求をぜずにどんな食材を買い付け確保していくのだという。その結果、日本は「買い負け」をし、買いたくても売ってもらえない状況になっているというのだ。

もちろん、これは「食の安全を守る」という姿勢とはまったく別の、そして味の本質ともかかわりのない『規格にあつていれば安心』という理屈にならない理屈でモノを売り買いしてきた日本人の「歪んだモノへの信仰」がもたらした事象なのだ。

それにしても、本質とはかかわりのない大きさや形・色といった「規格」にばかりこだわりの、それをありがたがる姿勢から脱却しなければ「不正の温床」を根絶やしにすることなどできはしないはずだ。

過激な言い方かも知れないが、味もわからなくせにミシュランが三つ星をつけたというだけでその店をあがめ、その味を礼賛するような「似非食通」ばかりになってしまえば、そのレストランは努力を惜しんだり、「ほんとうの料理」を求めて来店する客をも粗末に扱うようになってしまいかも知れないではないか。

そうしたことが「産地偽装」や「食材・調理の偽り」の遠因としてあるということと考えれば、自分以外の誰かによる評価に頼ることなく、自分なりの価値判断ができるよう自己を成長させることが大切なのではないかと強く思わなければならない。

言われなく「ブランドを信仰する」ことなく、自分にとって価値あるモノとそうでないモノを見極める目、見抜く目を持つこと、それがこれからの社会を生きていく上で、もっと言えばこれからの社会をつくる上で重要になるだろうと思われるのである。

それは、換言すれば揺るがない自己を確立するということに他ならない。他者のモノサシに頼ることなく、自らの目で見、判断し、決定することのできる自己を確立するということだが、それはアイデンティティの問題とも通じるものがある。

哲学者の内田樹氏は「大人になるための経済活動」(『atプラス03』)で、戦後日本人のアイデンティティ(自己同一性)という視点から次のように論じている。

内田氏は、戦後日本では、家や車から酒や苦楽に至るまで、『どんな商品を購入するかによって、その人が何者であるかが決定される』というイデ

オロギーが私たちの社会における支配的なイデオロギーになった」と指摘し、その上で「経済社会は、買わなければ自分らしくなれないと脅迫し続けて購買欲を喚起したものの、その度が過ぎて、アイデンティティを諦める人々を作り出してしまった」と言う。

このところ我が国の政府は、消費を煽るかの如き「バラマキ」と揶揄されても致し方のないような政策を次々と打ち出しているが、そうした政策が国民にとって望ましいものであるか、国民一人一人の「民度」を高め、ひいては幸せを実感できるものにつながるかどうか疑わしいものがある。エコポイントと称して、テレビや冷蔵庫などの家電製品を購入させ、一時的に市場が賑わったにしても、それがなくなれば即座に購入の動きは停滞し、もとの状態に戻ってしまったのではないか。購入する側も、その製品を欲して購入したというよりも、今ならエコポイントがつくが、時期を外せばそれがなくなる、買うなら今だ、という強迫観念にかられて購入した向きも多いのではなかったか。

エコカー減税、エコカー補助金なども同様である。それが必要なものであるかどうかにかかわらずなく、市民の物欲を刺激し、購買の欲求を煽ることで市場がにぎやかになりさえすれば長く続いた不況から脱出できると安易に想定して打ち出した政策のようにしか見えないが、それはまるでバブル時代の狂騒をノスタルジックに懐かしみ、あの時代の反省をないがしろにしてそこに立ち返ろうとしている姿にしか見えない。

それでは「モノ」が売れない状態を望ましいと言っているのかと言えば、そうではない。

「モノ」はもう十分に行き渡っているのだ。拡大と成長こそ豊かさや幸せにつながると思っていて「持つこと」をめざした結果、失ったものの大きさと大切さに国民の多くが気づき始めたのだ。それは自分のモノサシを棚上げしてまでモノを手に入れることに走ってはみたものの、気づいてみれば物欲には限りがなく、すでに豊かさを手にしているにもかかわらずいっそう不満感や不足感がつゆる自分の現実を思い知らされ、改めて「ほんとうの豊かさ」について再確認しようと思いついたのだ。しかも、そこでは「自分を見失っていたこと」すなわちアイデンティティをも喪失していたことに気づき、ほんとうに必要なモノ・コトを手に入れることの大切さに思い至ったのだ。

それは、いわばGDP（国内総生産）信仰に対する懐疑の態度である。経済学者の高橋伸彰（立命館大教授）は、「バブルが発生して以降はGDP

Pが増えても生活に対する満足度はほとんど上昇しない状況が今日に至るまで続いている」と指摘。むしろ「無理に高い成長を実現しようとすれば過度な外需依存に陥り、今回の経済危機で経験したように、世界貿易の変動に対して脆弱で不安定な産業構造に立ち戻ってしまう」と述べ、それよりは「ゼロ成長」を前提に、富の分配を重視する政策論の展開を提案している。

「消費を誘発して経済成長を」というのはわかりやすい理屈ではあるが、何によってアイデンティティーを確保するのかを見直さなければ、いつそうむなしく、ますます不快感や閉塞感に襲われそうだ。

いたずらに拡大と成長をめざすのではなく、ここは落ち着いて充実と安定をめざし、日本独自の文化と歴史に裏打ちされた「誇りある豊かさ」を求めて動き出すべきではないだろうか。

そこで大いに参考になるのは、チベット仏教の国「ブータン」である。

ブータンは今、第四代国王ワンチュク王の唱える「国民総幸福論」のもと、物質的な豊かさだけでなく、精神的な豊かさも同時に進歩させていくことを国是に新しい国づくりをしているところだが、その成功によって「奇跡の国」として注目を浴びているのだ。

世界の多くの国がGDP (Gross Domestic Product ≡ 国内総生産) を高めることに関心を集中させている中で、GNH (Gross National Happiness ≡ 国民総幸福度) という独自の考えを打ち立て、開発はあくまでも「国民の幸福を増大させること」をねらいとしておこなわれるべきである、という政策をとっているのである。

世界から注目を浴びているその独自の考えはどこから来たのだろうか。1960年代〜70年代初め、ブータンでは先進国の経験やモデルを研究したという。その結果、「経済的な発展は南北対立や貧困問題、環境破壊、文化の喪失につながり、必ずしも幸せにつながるとは限らない」という結論に達したのだという。そこでこれまでのブータン国王は、『ブータンは近代化しなければならぬ。しかし西洋化してはいけない』との基本的な考えで政治を司ってきており、現在のワンチュク王もその考えを継承した上で「GNH」を唱えているのだという。

そうした政策のもとで生活する市民の多くは、これまでの国王が『人生のすべてはお金ではない、私たちは豊かにならなければならないが、金持ちになつてはいけない。西洋の国々は金持ちかもしれないが、必ずしも豊かではない』と指摘したことを踏まえ、ブータンでは、国民総幸福量の助けを得て、

人々すべてが豊かになってほしいと願っていると言う。

それは、ワンチュク国王の「すべての国民が幸せを追求できる国づくりをするのは国家の、政府の義務である」との考えを背景にしていることだと言う。

その結果、驚くことにブータンでは『あなたは幸せですか?』という質問に対して、国民の90%を超える人が『幸せだ』と答えたそう。翻って日本人なら何%の人が『幸せ』と答えるだろうか。

この彼我の差の大きさを見せつけられると、なおいつそう我が国の為政者の打ち出す政策及びその政策の背後にある理念の貧弱さや底の浅さに暗澹とするほかはない。

幸福感の背景にあるものについて、ブータンの首相は『自分が何者であるかという感覚を持ち、自分自身を誇りに思う根拠を持つということ。それは自国の文化や自国の在り方を守ることに対し、より大きな責任を感じるということである』と言う。それはまさにアイデンティティの問題である。

ここで「誇り」と言っているのは、安倍元首相が言うような次元のものではない。安倍元首相の言う「誇り」の内容が明確ではないし、何よりもそのために国が何をするかといったことについて具体的に何も言っていないし、情緒的な感想でしかないからだ。

「誇りを持つ」と言われて誇りが持てるということなどありはしない。まずもって、誇りが持てるような国に変わることが先なのだ。そうした国で生活してはじめて「この国に生まれてよかった」「もつとこの国をよくしていこう」という誇りと自覚が生まれるのだ。

そう考えると、「深みのある国」としてのレベルを高めていくことが肝要かと思われるが、バブル時代の狂騒を懐かしんで国民に「カネをやるからあれも買え、これも買え」というが如き政策しか打ち出せない政府では、それも遠い彼方にあるようにしか思えない。残念ながらその状況は政権が交代してもいつこうに変わらない。むしろもっと悪い状況に陥っているようにすら見える。

しかし、問題は私たちの「今」ではない。子や孫の世代、そしてまた次の世代の人たちが自立した生活者として誇りと自信を持って生きていけるようにすることをこそ、めざさなければならないのだ。

そこで私たち大人は、じっくり立ち止まって何が子どもたちの将来の幸せにつながるかについて、そして幸せにつながるような「生き方や考え方、価値

「価値観」について熟慮し、自分自身を確立していくことの大切さを基盤に生きてみせることが大切になると考えている。

そこでは、当然のことながら何が大切かについて「見極める目」を持つことが重要になる。他人のモノサシではなく、自分自身で判断し選択・決定しつつ生きていく姿を子どもの前で展開していくこと、そのことでしか子どもにも「誇りが持てる生き方」をめざした人間的な成長を促すことはできないだろう。

「見極める」ことのできる自己を確立することが教育の重要な視点の一つである、と考えるゆえんである。

しかしそれは正解を「覚え」、知識を「蓄える」学習では身につくことはおぼつかない。モノゴトについて「よく見て」「考え」、本質を「見抜き」「見通す」経験ができるような学習活動を通すことが不可欠だ。そうした構えや資質、能力は大人になってある日突然身につくものではない。多くの解答の中から、自分にとっての正解、クラスにとって望ましい答え、自分たちの生活にとって「善し」と思われる答えを探る活動を通すことでしか身につかないのだ。そこでは多くの失敗も体験することだろう。その失敗体験を通してまずまずモノを見る目が磨かれていくのだ。成功体験から多くのことを学ぶことは期待できないが、失敗体験からは多くのことを学び身につけることができる。学習活動は、そうした意味のある失敗をするまたとないチャンスなのだ。それでこそ「ほんものの目」が養われ育つことを信じて、私たち大人は教育実践を展開していかなければならない。

学校で「塾」？

これはまさに「教育の危機」と言っても過言ではない。

つい先日、東京杉並区立和田中学校が大手進学塾「サピックス」の講師を招いて有料の夜間授業を計画していたが、都教委がこれに待ったをかけたという報道がなされた。

この報道に接してはじめて、そのような「ばかげたこと」を計画している公立中学校があるなどということ知らなかった。さらに驚いたことに、この計画を杉並区教委が積極的に支援しているのだという。

この案を創出したのは、リクルート出身の民間人校長として有名な藤原和博和田中学校長。いかにも民間人が考え出しそうなことではないか。

何と言っても問題なのは、「学校教育の目的」をはきちがえてしまっていることである。

学校教育の目的は、受験のための知識や技術を身につけさせることにあるのではない。

一方、塾は「営利」を目的とし、「教育」という名を借りて子どもたちに受験にパスするための「合格に必要な知識とワザ」を身につけさせることを一義のねらいとしている。

そこでは「教育の理念」とは無縁の「教育もどき」の試験に向けた訓練・教練が行われているに過ぎず、何はともあれ「試験にパスさせる」ことだけが念頭におかれる。

そこで指導にあたる講師は「受験のワザ」を身につけさせるワザには優れているかも知れないが、子ども一人一人のよりよき成長についてどう考え、どうとらえ、どう実現していくかといった「教育の質」について深く理解しているわけでもないし、理解する必要もない。どれだけ多くのことを効率よく「覚え込ませられるか」、そして受験のテクニクと正解を導き出すコツを正確に伝えられるかだけが問われるからである。

しかもそこでは「知」は「知性」を前提としたものではなく、短期の「記憶」をねらったものとして、試験が終われば忘れ去られて結構、という前提のもとで叩き込まれる。

そうした「短期の記憶・知識」を効率よく蓄えさせる技術に優れているからといって、学校が（しかも義務教育の公立学校が）その講師の指導にすぐるという姿勢はいかがなものか。

学校としての誇り、教育専門職としての誇りや教育理念を、どこかに置き忘れてきてしまったのではないか。

単に「民間人校長」が教育の素人なりの「かわいいげのあるアイデア」として考え出したというだけのことであればまだ許せるが、区教委までがその後押しをしているということになると、教委としての「学校教育観（学校教育というものに対する考え方）」の底の浅さを露呈したものの、教育そのものを崩壊させかねない愚かしい考えとして看過できない動きである。

聞くところでは、渡海文科相もこうした動きを容認するかのような発言をしているという。本来であれば、こうした次元の低い教育観について啓蒙し、「教育とはそのようなものではない」と指摘し、方向転換を促すのが文科相の務めではないか。にもかかわらず、積極的に容認の姿勢を言明するなど、文科相としての資質が疑問視される。

また、仮に百歩譲ってこれを「教育活動の一環」として認めるにしても、第二の問題点として、公立諸学校における教育が「有料」で行われる、ということが挙げられる。

報道に依れば、サピックスの本来の授業料の半額程度で受講可能にしている、ということであるが、たとえ半額であっても公立学校が特定の営利企業に場を提供し、その営利活動に手を貸すなどということがあってよいはずがない。

さらに受講を希望する生徒全員が受講できる態勢になっていたのであれば、まだしも、どうやらそうではなさそうである。差別化にいつそう拍車をかけるのではないか、という懸念も持たれるこの動きは、どこからどう見ても「よりよい教育の実現」をめざしたそれではないようにしか見えない。

学校が塾になってしまったのは、「学ぶことを通して、学ぶことの意味や楽しみを実感」し、生きて働く力としての「学ぶ力」を身につけさせるという、本来の学校のあり方からますます遠ざかってしまうという意味で、まさに教育の根幹にかかわるところの問題であり、「教育の危機」を窺わせる話題である。

都教委が指摘するような「教育の機会均等」に抵触するかも知れない、などといった制度上の問題ではないのである。

昨日の新聞による報道では、いったん待ったをかけていた都教委が容認に

動き出したとも報じられていた。教育について門外漢の石原都知事が「従来の学校では打ち出せない斬新なアイデアで良いではないか」と発言するのとは意味が違う。都教委までがこれを容認するとすれば、学校教育そのものが崩壊しかねない事態を引き起こす危険性を孕んでいることを承知で容認しようとしているのであろうか。

目が離せない事態である。

(2008/01/11)

学習意欲を

『学力にまして、興味や意欲はお寒い。「科学についての読書が好き」は最下位に甘んじた。

科学に関してテレビや新聞、雑誌に接する率もビリである。

興味という土壌が豊かでなければ、学力という果実の収穫は望めない。

日本の物理学は戦後、急速に伸びたという。ノーベル賞の朝永振一郎は外国人にわけを聞かれ、

「戦争中の知的な飢えを満たそうとしたから」と答えたそうだが、いたれり尽くせりの情報で腹がいっぱいになると、好奇心は麻痺（まひ）するらしい。

いまや情報はあふれ、「なぜ？」の問いに手早く解答を得られる時代である。不思議への感性が乾いて、「なぜ？」そのものが減りつつあるともいう。予見してのことだろうか、朝永は教師の役目を、生徒を知識で満腹にさせないことだと言いつつ残している。』

12月6日付けの朝日新聞、天声人語にはこのように書かれている。

400字にみたないこんな短い文章で、いまの教育問題の核心をついて的をはずさないという「文章のお手本」に出会ったような気がして感銘を受けた。

食べ物ですらテーブルいっぱいには並べられたら、食欲も減退する。

はじめのうちこそ、『こんなにたくさんのご馳走があつてうれしい』と思えるかも知れないが、食事の度に大量の料理が並べられれば、しかも『食べたい』と思う前にテーブルの前に坐らされるのが続けば、自分の欲しい食べ物を手に入れたという実感が損なわれると同時に、あまりにも大量の料理を目の前にして「うんざり」してしまったり、『こんなに要らない』と拒否したくなるかも知れない。

ここまで書いて芥川龍之介の「芋がゆ」を思い出した。芋がゆを腹一杯食べてみたいものだと思願していた五位の某が、ある貴族の招待で芋がゆを馳走される段になり、ほとんど食することが出来なかった。あれほど腹一杯食べてみたいと思っていたにもかかわらず、あまりにも大量に準備された芋がゆを前にしたとたん、食欲を失ってしまうという話である。

食も知識も、自分の手で手に入れるからこそ、かけがえのない知として身に付く。

自分の手で手に入れようとするのは、その対象に深い関心を抱いているか

らだ。

だから教師の役目は、その関心を掘り起こすこと、目ざめさせること、不思議の世界に誘うことにあると言つてよい。自分も驚き、感動し、対象との出会いを愉しんで見せること、対象に近づくことに憧れることで、学習者を新たな出会いの場へと誘うことができるが、それこそ教師の役目である。

「生徒を知識で満腹にさせない」とは、知識を与え続けるのではなく、知識を手に入れたいと思える状況をつくり出すことに他ならない。

学習者にそうした内的欲求が生じるようにしたければ、教師自身が事象の不思議さに瑞々しい感性で接し、未知のことがらへの憧れを抱き、それに触れることを心底愉しむ「問う主体」として学習者の前に立つことが望まれる。

ところで、毎日新聞の同日のコラム「余録」に次のような一文を見つけた。

『テストを受けたのは小学6年から授業内容が大幅削減された今の学習指導要領で学んでいる「ゆとり教育」世代だ。

いきおいその弊害が裏付けられたとの声が高まるが、そもそも詰め込みよりも個々の学習意欲を高めようというのがゆとり教育だったはずだ。教育は大人の思い通りにいかない。』

従来の学習指導要領の根幹をなすのは、学習意欲を高めること、そして内発的な意欲に基づく学習を展開し、生きて働く「知性」を育てることにあったのは余録子の言う通りである。

しかし、「教育が大人の思い通りに」いかなかったのは、そこに流れる理念を正しく理解できなかった、あるいは深く認識できなかった「大人」のせいであり、決して「大人の思い通りにいかなかった」わけではない。謝った理解に基づく「思い」そのものに間違いがあったとしか思えない。

内発的な意欲を高めること、そのことの意味や意義、価値についてどれだけの学校がしっかりと理解できていたかと言えば疑問であるし、文科省がその理解をうながすためにどれだけの説明をしたか、それが十分なものであったかどうかと言えば疑問が残る。

従来の指導要領の根幹をなす教育理念が正しく理解されなかったこと、文科省があたふたと朝令暮改さながらに混乱させるような説明や通達を出し、理念をあいまいにしてしまったことなどが、1980年代前半からコツコツと進行させてきた教育改革を破綻させてしまったと言つて良い。

ここは一度立ち止まって、教育の将来をしっかりと見据えた展望を持つべ

きだろう。

付け焼き刃のような対処療法では、「知に憧れる」市民、「考え解決をめざす市民」の育つ教育社会、学習社会の実現は難しくなるばかりである。

(2007/12/07)

「子どものために」という視点を

ここ何日か、OECDの国際学力調査の結果を受けて報道されるメディアの報道内容や文科省のコメントに何かしつくりとこない違和感を感じている。

そこでは「世界の中でより高い順位を獲得できるだけの学力を」という観点からさまざまに論じられているが、そのねらいは「子どものため」「子どもよりよき成長のため」ではないように聞こえるからである。

日本という国が世界を科学力で、あるいは技術力でリードするために、子どもにがんばってもらわなければならない、と考えることであり、端的に言えば「子ども一人ひとりのため」ではなく「国のため」にそれを願っている、希求しているというニュアンスが各種のコメントからぶんぶんと匂ってくるからである。

いわば、大人の都合で、あるいは国の都合で語られ過ぎてはいはしないか、というのが違和感のもとだとすぐに気づいた。

子どもが学ぶのは、自分が豊かで幸せになるためではないか。

「豊か」と言うことと誤解される怖れがあるが、物質的に充たされるという意味でないことは言うまでもない。

「生き生きと自分の人生を生きていく」ことのできる豊かさであり、新たな自己との出会いに感動し興奮する喜びを実感できる豊かさであり、他に貢献できる自己を見いだす幸せであり、それらのことによって生き甲斐を実感できる豊かさであり、充実感を味わいながら生きていく喜びを感じるときの豊かさ等々である。

物欲を満足させたつもりでも、人は充たされることはない。

西洋の古い諺にも『富と海水は飲むほどに渴く』とある。

持つことにこだわれば、持てば持つほど「より持ちたく」なり、その欲求には際限がなくなる。

しかも物欲は人間としての品性にもよからぬ影響を及ぼしかねない。

モノを持つことに執着すると、人間が下卑たものになる。

しかし、知的好奇心にもとづく知的欲求や知的向上心、自己の力や世界の広がりを求める探求心なども際限がないが、それは品性の下劣さにつながる、真の豊かさを求める欲求だと言える。

学力の低下や学習意欲の低下、なかんづく科学への関心の薄さを懸念する声に、少なからず違和感を覚えるのは、ほんとうに子どものためを思っていることなのか、子どもの豊かで幸せな将来を思っていることなのか、を疑わせるようなニュアンスも窺えるからだ。

そのような「一人ひとりの子どものために」という視点を欠いた教育論議では困るのではないか。

何よりも子ども自身が迷惑に感じるのではないかと強く思われてならないのである。

(2007/12/10)

大地震の報に接して

先週の火曜日（2011/02/22）、ニュージーランドで大地震が発生。歴史的な建造物が多いクライストチャーチで、語学留学で滞在していた学生の多くが被災したのをはじめ、各地で甚大な被害が生じたと報道されている。

報道に拠れば、ニュージーランドは日本と同じように地震国であるという。火山も多く、インド・オーストラリアプレートと太平洋プレートの境界付近にあるため、大地震が頻発するのだという。日本からもスーパーレスキューをはじめとする救助隊が、ただちに現地に飛び救助活動を展開していると連日報じられているが、いまだ安否の不明な被災された方々も多く、無事に救出されることを祈るばかりである。

ところで、そのクライストチャーチに建つ歴史的な建造物は、180年ほど前から入植が始まったイギリス人よって建てられたものだという。

イギリスは地震が少ないことから、彼らよって建てられたそれらの建物は地震に対する配慮がなされておらず、今回の地震が直下型だったこともあってひとたまりもなく崩壊してしまったものが多かったのだろうとも言われている。

ここまで書いてきて、寺田寅彦の言葉を思い出した。

寺田は、『台風の通り道にある日本列島は、台風のみならず、地震、洪水、津波など自然の脅威にさらされて人間の生活が営まれてきた。そのような不安定な自然の中で生活を営んできた日本人と地震や洪水などの自然災害の少ない西ヨーロッパに住む人々とは、モノゴトを見る見方や考え方が根本的に異なっている』と指摘したのである。

西ヨーロッパには地震も台風も洪水もなく、とても安定している。それゆえ、自然のあり方やメカニズムについて、隅々まできちんと計算できる。

つまりその全体像を合理的に計量して、これ进行操作し、そして最後に開発し、征服することができたという。

その結果、形成されたのがヨーロッパの自然科学だと言うのである。

一方、日本の自然は不安定であり、100年、200年の間の問題ではなく、まさに千年、二千年の長期にわたって続いてきた自然的条件である。

そういう自然がひとたび暴れ出し、猛威をふるうとき、日本人は、もうその自然の脅威の前に頭をたれるほかはなかった。従順になって、自然に反逆することなどはじめから諦め、我慢をしてきた。

何と言っても、ひとたび大地震が起きると、拠って立つ大地、盤石であるべき大地が大揺れに揺れ、立っていることさえおぼつかなくなるのだ。

そういう経験の累積によって仏教の伝来以前から、既に風土的に形成されてきた縄文以来の「天然の無常」という感覚と仏教の無常が、仏教という新しい宗教を招来したときに重なったのではないだろうか。

その「天然の無常」という感覚が、日本人の生き方に大きな位置を占め、他の国の人々とは違う独自性の基盤となっているに違いない。

ある日の読売新聞「編集手帳」には、次のように書かれていた。

「日本文化の真髄とされるワビ、サビの根源は地震と台風だ」と、作家の山田風太郎さんが晩年の随筆に書いている。

“もののあわれ”など独特の無常観はそこから生まれたと。

日本では、不安定な自然を、克服すべき対象としてではなく、「畏れ」「敬い」、同時に「共生」の対象として受け容れ、その上で安心立命を図るといふ精神風土が大昔から培われたのであろう。

そこでは、『何が起るかわからない』という自然観が「絶対」よりも「相対」を重んじる姿勢を生み、西洋諸国とは異なる宗教観、科学観、人間観、自然観等々の形成につながったことは想像に難くない。

そのような日本人独自の見方や考え方をかなぐり捨てて、グローバル化という美名のもと、西洋流の経済優先・効率優先の競争拡大による成長をめざす社会になってしまいうようなことがあれば、日本人の精神風土にそぐわない「さまざまな問題を抱えた社会」になってしまいうのではないだろうか。

世の中には、「無量」と「数量」の二つの世界があるが、仏教は「無量」という考え方に立っているとされていると言われている。

「無量」とは、数えることができない、量ることができない程の大きさという意味であるが、それはまた「量るな、数えるな、比べるな」という教えであるらしい。

そうした世界観に立つと、これまで世界が追い求めてきたような成長路線、

「こころ」を忘れて「モノ」や「利益」に執着してきた社会のありようが憂慮されるだろう。

西ヨーロッパの安定した自然の中で育ててきた「自然科学」とは対照的に、「天然の無常」や「無量」という精神風土を培ってきた私たちだからこそ、世界の中でその独自性を生かして主張できることがありそうな気がするのだが、どんなものだろうか。

いわば「スペック」や「数値」では測ることのできない「妙味」や「魅力」を感じ取り、味わうことのできる精神風土は、東洋に住む私たちの精神を形づくる重要なバックボーンであり、文化そのものであると言って良いし、そのことを誇って良いと思われるのである。

例を挙げれば、聴力や視力は数値で表せる。しかし、見抜く力（眼力）や聞き取る力といったものは、数値では表しようがない。そうした数量化できない資質や能力の例は、私たちの身の周りにふんだんにある。それに比べて、数量化できることはほんの一部であることに気づかされる。

自然を絶対的な数値に置き換え、分析的に見て一般に敷衍して考える方法は、いわば科学的な自然に対する態度であり、合理的な説明を試みようとする態度であると言える。

一方、自然の全体を部分の総合としてとらえるのではなく、相対的に、そして全体を全体としてあるがままに見て味わおうとするのは、直感的に理解しようとする態度である。

科学的な方法の発達によって産業の発展が可能になり、私たちの生活は物質的に豊かになった。いわば、自然を科学の力でコントロールすることによって、多くのモノを自分の所有物として持つことができるようになったのである。

そしていつしか、モノではないものまでモノとしてとらえるようになり、そうしたもので他より「より多く持つ」ことに執着するようになってしまえば、内田樹の言葉を借りれば、『「どんな商品を購入するかによって、その人が何者であるかが決定される」というイデオロギーが私たちの社会における支配的なイデオロギーに』までなってしまう、モノを持つことで自己の存在を主張しようとするようになったのである。

新井郁夫（上越大学教授）は、「持つ」のではなく、対象があるがままにとらえ理解しようとする態度は、『それを理解することによって自分が高まり、しかもそのことによって他の人が高まる可能性を奪わない』が、「持つ」

ことをベースとした文化では『ある人がより多く持つようになれば、他の人はそれだけ少なくなしか持つことができない』ということの結果として引き起こす、と言う。

しかも、『問題は、どうも「持つ」文化の方が力が強くて、「ある」文化を追い出そうとしていることだ』と指摘する。

ここで私たちは立ち止まって考えなければならぬ。自分たちの精神風土を形づくっている「無量」という見方をベースとした「共にある文化」が脈々と体内に息づいていることに改めて思いを致し、豊かな感性に基づいた「ほんとうの豊かさ」を求めて動き出すために何が必要か、どう変わることが必要か等々についてである。

小林 一也（拓殖大学教授）は、かつてある論文の中で、『高度情報化社会では、情報を捨てることを含め、何を選択するかという主体性の保持に向け、心を鍛えることが極めて重要である。自然に対する畏敬の念、友情、モノづくりの楽しさなど、五感や第六感を含めた心の働き、人間関係を分断することなく心を耕し、心のトギスマシという生涯の営みをより大切にし、伝統と進歩とを調和させ』るべく教育にあたることが肝要だ、と述べている。

モノゴトについて「学ぶ」ということは、実はそうした数量化できないことを身につけていく作業ではないかと思われる。それは「見方・考え方・取り組み方」などの学び方にかかわるものばかりではなく、よりよく生きようとする意志や構え、高々とした志や見識を備えた「人間の育成」にかかわる領域に及ぶはずである。いたずらに、競争を賛美し効率を優先させるような教育に陥ってはならないのである。

ニュージーランドにおける地震の報に接して、考えを飛躍させてみた。それにしても、まだ崩壊した建物の中から見つからない方、見つかったも身元のわからない方が多数おいでになるという。一刻も早くご家族のもとに帰ることができるよう祈るばかりである。

(2011/02/28)

学びの楽しさを

私たちが学んだ当時の学習理論は、条件反射に代表される「刺激↓反応説」をベースとした心理学の成果に多くを依存した学習理論であった。

有名な「パブロフの犬」の実験に象徴されるように、ある刺激に対して動物が一定の反応を示すこと、そしてその反応の累積が学習の結果となって個体の行動をつくりあげていく、という理論をよりどころとした学習理論である。そこで、○○な反応を引き起こしたければ、□□な刺激を与えればよい、ということ素朴に信じて学習指導を展開してきたのである。

ところが、そんな思い込みに対して、同じ内容や同じ手立てで学習を仕組んでも、Aさんはよく学習するし、Bさんは思うように学習を進めることができなかったということが日常的な指導の場面ではよく起こる。このようなことがなぜ起こるかということについて、従来の「刺激↓反応説」ではうまく説明できなかったのである。

認知科学の成果は、そのような「外界からの刺激に対する個の反応」という視点からの学習理論の誤りを正し、学習者の内面で起こっているさまざまな心の動きが大きな働きをするものだ、という発見をもたらした。

それは、学習対象に対する内発的な動機を支えとした学習意欲、さらには自分にもできるかも知れないという効力予期、そしてまた取り組みを通して実感される有能感（効力感）などであり、そこに共通するのは学習対象と自己とのかわりに対する学習者の意識である。

すなわち、学習をよりよく展開していくためには、学習対象と自己との間にあるような関係を見いだすかにかかっていると云える。

そのことは、教える側の論理を重視して繰り返し広げられる学習指導では、それぞれの学習者が主体的な学習活動を展開していくことなど期待できそうにないということを教えてくれる。

そうした学習指導のあり方を見直し、学習者である子どもたちがそれぞれに「学ぶことを喜び」「手応えを感じて」「満足を得」ながら学習していけるよう、視点を変えて学習を構想すること、そして楽しい学びの世界へいざなうことへと学習指導を転換することが望まれる。それが「子どもの側に立つ学習指導」の眼目である。

先にノーベル物理学賞を受賞した京都産業大教授の益川敏英氏は、講演の

中で、私たちが学ぶのは「より多くの自由を獲得するためだ」と指摘した上で、study (学ぶ) の語源には楽しみという意味がある。本来知ることには楽しいこと、ぜひ楽しみ方を探って欲しいと学生に呼びかけている。ここで、Study の対語として益川氏が用いているのは「勉強」という言葉である。

氏は、『勉強という言葉には苦しみを強いる意味があって大嫌い』と言う。同感である。「勉強」は、「しいて(強)つとめる(勉)」という文字で構成されているが、漢字の本来、中国では「無理(に)」とか「無理をする(させる)」という意味で使われているようで、そこには「学習する」という意味はまったく含まれていない。

さらに興味深いのは、明治になって西洋から伝えられた概念を日本語に置き換えるときに、「苦しみをともなう労働 (painstaking labor)」も「study」も、ともに「勉強」と訳したと言われている。

どうやら、学ぶという行為は、苦痛をともなう労働であり、苦しみをこらえてがんばることであるという観念を抱いていたのであろうことが窺える。そしてまた、がんばるにしても、がんばってゴールにたどり着くにしても、その過程にはつらいこと、困難なこと、くじけそうになる難題がなければならぬ、ということを前提にしているかのようなのである。まるで、難行苦行しなければ、「よき学び」「実りある学び」など為し得ない、と言っているかのようなでもある。

「L型の学習」から「S型の学習」への転換を標榜し提言してきた私としては、益川氏のような大学者から、そうした趣旨の発言をどんどん発信していただきたいところである。

ここで「L型」と言っているのは、「Learn (習う)」そして「Linear (直進)」の「L」である。すなわち、教えてもらって習うこと、プログラムに沿って一直線上を戻ることなく進む堅い構造の学習スタイルを言い表している。

一方「S型」は「Study (探求・研究)」そして「Spiral (螺旋状)」の「S」であり、自分の手で研究的に取り組み、しかも行きつ戻りつしながら確かなものを手に入れていく柔らかい構造の学習スタイルのことである。

「S型の学習」は、未知のことごらの正体に自らの手で迫れるチャンスであるから、誰かに「強いられてしている」という受動的な学びにはならない。しかも、自分の手で新しい知の世界を拓いていくことが実感できることから、自分を肯定的に受け止める心情や自分は捨てたものではないという有能感も

獲得できる。

まさに「学び」の目的は益川氏が言うように「知る自由を獲得」することなのだ。知ることを求めて「学ぶ」ことは、自分の世界の広がりを手応えをもって実感し、知ることによって、さらに新しい謎に満ちた世界が広がり、問い続けることの楽しさやおもしろさを味わう行為なのだ。それはまさしく「S型の学習」の姿そのものである。

自己内に生じた「問い」の解決に向けた行動が納得いく「解」に結びつくかどうかはともかく、「解」を求めて粘り強く取り組むことそのものを楽しめるのが「Study」であり、益川氏の言葉『努力を惜しみなく傾注できる道があり、120%の努力を傾注してもなお楽しいと思える』取り組み、それ自体が学びなのだ。

「学力の低下」を懸念する人は多いが、それを生じせしめているところの「学習意欲の衰退」について指摘し、懸念する人は多くない。

学習意欲を衰えさせたり萎えさせたりしてしまっているとすれば、それが何に起因するのかを明らかにし、それを防ぐ手立てをすることがまず肝要であるにもかかわらず、現象面にだけ着目し、ヒステリックに「勉強の必要性」を言い立てるだけでは、ますます学習意欲をそぐことになってしまいうるし、学習から遠ざかっていってしまうであろう。

「わからないこと」があることが楽しい、問うことに心がはずむ、時の経つのも忘れるほどに夢中で取り組みたい課題がある、というStudyの楽しさや悦びが体験でき、味わうことができるように学習環境を整えることの方が喫緊の学校の、いや社会全体の課題なのではないだろうか。

ついでながら、そのような学習環境を整えるということは、『おもしろいと思うこと、自分にとってこれは捨てては置けないと思うことを見つけたさ』とでも言うように、すべてを学習者に預け、教師が何の手立てもせず手をこまねいて傍観することではない。

そこでは、私が30年にわたって、説き続けてきた「(教師にとって)学ばせたいことを(子どもにとって)学びたいこと」に転換するうまい手立てが不可欠であるし、その手立てを工夫し編み出すことができるのが、教育者としての専門性であり、それを実現するのが教師の務めであることに他ならない。

子どもが心はずませ、目を輝かせて、自分の問いに気づき、解明の道筋を見つけ、「がんばること」が楽しい、他のことをしていても気がかりで放

つては置けないと思ひ、ついつい心と頭を傾注させてしまうような、そんな
「うまい転換」ができるのは、教育専門職としての教師しかない。

指導法と呼ばれる指導のテクニクや指示の仕方など指導にかかわるワザ
は、数年も教師を続ければいやでも身につく。子どもたちを外からの力で勉
強に追い込み追い立てる技術なら、学習塾の講師でも持つことが可能だ。
しかし、外からの力ではなく、内発的な動機を生ぜしめ、その内発的な動機
に支えられて、「自らの学習」として自立的・自律的に学習を展開していけ
るような「うまい転換」をし、「学習を指導」することができるとは、深い
教育に対する理解と子供観・学習観を備えた教育者としての教師しかない。

教育専門職としての「誇り」が、まさにその一点にあることを再認識する
ことが、子どもに「ほんとうの学びを取り戻させる」ことにつながると信じ
て子どもを学びの世界にいざなっていきたいものである。

(2011/03/05)

終わりに

この稿は、電子書籍を作成する手順や方法を、実際に作成することを通して確かめるために構成したものである。

いわば実験なので、紙ベースの本のように多数のページで構成することは避けた。

最終的にどのようなファイル形式になるか不明なところもあり、容量が大きくなればなるほど、ダウンロードするなり、開くなりするのに時間がかかるだけでなく、表示も遅くなることが予想されるからである。

そこで、実験的な試みがねらいであることから、ページ数を抑えてそのような不具合を避けられるように考えたのである。

もし、ネット上の電子書籍作成にかかわるネット上のサービスが、私の望むようなものであれば、続編や続々編を作成したいと考えている。

併せて、将来どのように活用できるかといった可能性も見極めて行きたいと思っているが、私の希望するようなものであれば嬉しいが、という期待も持っている。

それはともかく、昨今、教育とは一見かわかりがなさそうであるが、教育さえ望ましいものであったのなら、起こらずに済んだかも知れないと思えるような悲しい事件、あり得べからざる不祥事が連日のように起きている。

教育の目的は、単に知識や技術を身につけさせることにあるのではない。その先にある「どう生きるか」について考えることが教育の最終的な目的なのだ。そこで、自然や社会の持つ緻密さや豊かさ、美しさ、不思議さなどに瑞々しく感応する「感性（よさに気づく感覚）」、感性に支えられて醸成されるところの「情操（よさに向かおうとする心情）」などがよりよく育つような学習環境を整えることが望まれる。

それは人間が豊かに生きていく上で望まれる「知恵」あるいは「知性」と言い換えても良い。片々たる知識のカケラの集合ではなく、自分の手でしっかりと構築し続けるところの「知の体系」をベースとした知性は、いわば人間として生きる上での「骨格と血液」と言える。骨格を育てずに、頭だけ育てようとした歪みがあちこちで膿を出しているのが日本の現代社会であると思われるのではない。教育を本来の姿、望ましい姿に立ち返らせ、学習を子どもの手に取り戻させる努力を惜しんではならない、と強く思うのである。

(2011/03/06)

著者紹介

仁田 悦朗 (ニタ エツロウ)

茨城大学教育学部卒業
兵庫教育大学大学院教育研究科修了
教育学修士
教育学名誉博士

日本音楽教育学会 日本電子キーボード音楽学会
全日本電子楽器教育研究会

主な著書に「コンピュータと音楽の学習」(東亜音楽出版)
「総合学習時代の音楽科教育」(東京図書出版会)
「先生のための速攻 DTM 講座」(ヤマハ)
など多数

現在 i-moa 音楽教育研究所主宰